

母のこたつに雪ふりつむ

作／広島友好

○時……ある年の冬。二月下旬から三月初めの数日間と、四月のある日。

○所……主に、母が入院したそれぞれの病院の病室、及び、母のアパートの部屋。

○登場人物

私（広兼友昭・ひろかねともあき） 劇作家・四四歳

母（広兼富子） 七三歳

妻（綿田時江） 病院の事務職・四七歳

そのほかに…

医者A（笠松） 四十代半ば

看護師A（棟田） 看護師長・五十代後半

医者B（池崎） 四十代前半

看護師B（佐伯） 三十代前半

叔母（三好三津子） 七二歳

債権回収会社の男（戸田） 五十代前半

妹（小室典子） 三九歳

保健師（石垣） 女性・四十代前半

医者C（米沢） 女性・開業医・五十代前半

看護師C（月岡） 四十代後半

司法書士（森口） 四十代半ば

息子（綿田かおる） 中学二年生・十四歳

医者D（木村） 七三歳

看護師D（屋敷） 四十代後半

火葬場の職員（畑中） 五十代前半

※「私」「母」「妻」以外のキャストは、何人かの俳優で役を分担して演じてもよい。

※簡素な装置を使い、転換などスムーズに行う。

二月下旬の午後。

A病院の母の病室。母、ベッドに座っている。病院の検査着を着て。ベッドのそばに車椅子。

脇の丸椅子に私。手帳にメモしながら、母の話を聴き出している。

私 ……で？

母 ……。

私 何件？

母 ……。

私 何件、借金があるん？

母 (しびしび両手の指で「六件」と私に伝える) ……。

私 そんなにい？

母 ……。

私 で、毎月いくら払いよるん？

母 ……。

私 黙っちよっても、なんも解決せんよ。

—間。

母 ……二万八千円。と振込料。

私 二万八千円？ 全部で？ 少なくない？ タンスに、一件九十万円ぐらいの督促状があつたけど？

母 (少しいらだたしげに) なんべんもなんべんも交渉して、そねえなつたぞつ。それって、みんな利息しか払いよらんのではないん？

—間。

母 (ベッドに置いた鞆から手書きの借金リストを取り出して) あんたがうるそ  
う言うけえ、まとめてみた。

私 何…？ 借りちよる所？ (書かれた数字を足し算して) ……ゲツ、三百  
四十万もあるじゃん?! ええつ? なんで!

母 ……友昭君、怒るでしようがね。

私 そりゃ怒るいね! なんて言わんのかね、こねえになるまで?  
いまさら言つても、どうにもなりやせんつ。

私 なんなんそれっ!

母 (体を揺すぶつて) ああつ、せな(背中)がっ……。 (痛い)

—間。

私 ……市役所は知つちよるん、借金のこと?

母 (右手の指で胸の前に×印を書きながら) サラ金とかに払うお金は、市は、出さ、ない。知られたら、すぐ保護切られるぞ。借金のことは相談、でき、ん。

私 ホントに？ 聞いたことあるん？

母 初めに、保護の用紙もらったときに、そう言われた。

私 全部黙っちゃったん、お父さんの借金のことも？

母 市は知らん。

私 (半ばあきれて) よう保護受けられたね？

母 あんたあ、聞いてくれんかね。お父さんが死んで、その分の保護のお金が出んはずじゃから、残りのわたしの分がどうなるか。市の水原さんに。

私 それ、電話があった。生活保護の名義を、お父さんからお母さんに切り替えるから、市役所に来てくれて。んで、家賃は今まで通り出るけど、生活費は八千円しか出されんからって。あとはお母さんの年金で暮らしていきなさいって。

母 水原さんが、そう言っちゃったぞ？

私 そう、水原さん……かな。ここの入院費は、出るらしいけど。

母 ……………。

——問。

私 ……あと、お父さんの相続放棄の書類は出したから。

母 はあ？ (耳に手を当て) 大きな声で言っ。

私 (病室の他の患者を気にして小声で) ほかの人もおるんよここ。(小声ながらも声を張って) ……お父さんの、相続放棄の書類、家庭裁判所に出したっ。

戸籍を全部そろえるのが、大変じゃったっ。お父さんの、生まれてから死ぬまでのっ。

母 わたしの分も、出した？

私 お母さんのも、康子お姉ちゃんのも、出したっ。典子は自分で出すって。

母 (両手をスリスリすり合わせて) ありがと。

私 ああつ、じゃけど——、連帯保証が残っちゃる。あああじゃ！ 自己破産せんにかかも——

看護師A、来る。看護師長。ベテランで落ち着いた雰囲気。

看護師A 広兼さあん、お変わりないですか。

私 ——あ、お世話になります。

看護師A ええですねえ、きょうも息子さんに来てもらって。仲良うて。もう少ししたら、心臓のカテーテル検査がありますからね。準備しといてください。またお呼びします。

私 はい。

看護師A、去る。

母 (強く嫌がって) 検査はすっかりしてっ。二週間も、三週間も。検査は受、け、ん。

私 またア！ 説明したでしょ、大事な大事な検査なんじゃって。心臓痛いでしょ。心臓の血管をくわしく調べるんで。お医者から説明受けたじゃん。狭心症の疑いがあるぞ。同意書にもサインしたの。

母 食事はまずいし、足は冷えるし。寒いッほんとにッ。

私 いま関係ないじゃんよそれ。お父さんの電気アンカ持ってきちやげるけえ。

母 (吐く仕草をして) ウゲエって、胃カメラしたけど、なんもなかった。

私 心臓のカテーテル検査なの今度のは。貧血でしょうがね。

母 ああっせなが痛いっ。

私 ほらあ (言わんこっちゃやない)！ (病気のために元気なく丸まった母の背中をなでてやる) ……………。

母 (かなり興奮している) ……………。

私 (少し優しく) 悪うならんように検査するんでしょ。ね、我慢して。きっと良くなるけえ。

母 きようは体調がええの。廊下をちよつと歩いた。

私 きのはいちんちポーツとしちよつたじやない熱で。座薬入れてもらって、楽になつちよるだけなぞ。

私、母の背中をなでる。……………

母 ……わたしも、する。

私 うんっ。ちゃんと検査して。

母 ち、が、う。自己破産。

私 ああつ——。……じゃけどお母さん、年金があるじゃん。年金あつたら難しいんじゃないん？ それに田舎に土地があつたよね、菅内(すげうち)の田舎に。財産あつたら駄目なんじゃないぞ？

母 菅内の土地は……

私 何？

母 ……マル富士から抵当に押さえられちよる。

私 ええっ?! (借金リストの紙を見て) どれ？

母 ここには書いちよらん。

私 まだ借金があるん?! いくら？

母 三百……六十……。

私 なんなんもうっ?!

母 一回分は返したけど、あとは社長が当面払わんでもええって言った。

私 払わんでええって? そのの、サラ金の社長が?

母 ほう。(同意「そう」)  
私 そんなんあるん、払わんでええ借金って？  
母 じゃから放ってある。  
私 競売(きょうばい)にかけるつもりじゃないん？ 土地取られるよ！  
母 ……………。

——間。

母 あんた、今月の分、払っちゃってくれんかね？  
私 え？  
母 (鞆から封筒を取り出して) 支払いの、振込カード、入っちゃるから。  
私 俺が、払うの？ 嫌じゃなあ…………！  
母 通帳も渡しちよくから。ね。年金の。  
私 もう…………。(しびしび母から通帳を預かる。開いて見る)  
母 (私の耳元に) ……が、暗証番号。  
私 わかった。  
母 手提げ袋にヘソクリ入っちゃるけえ。使ってええから。  
私 ヘソクリあるん?! 手提げって？  
母 わたしの部屋の、ピンクの、買い物袋。青い衣装ケースの中。

私、借金返済用のカードが入った封筒と通帳をポケットにしまう。

私 ほかに要るもんは？ ほしいもんじゃない？ お金ある、テレビのカードとか買  
母 う？  
母 ん。  
私 着替えは？ パンツとか。  
母 電気毛布持ってきて。  
私 ええんかなあ、病院で電気毛布使って。あつたかいんじゃないんこ？  
母 ええからっ。寒いッ。  
私 (母のわがままにあきれつつ) もうっ…………。

——間。

私 (ポケットから時計を取り出して) じゃ、行こうか。時間じゃ。  
母 今度にする。  
私 またあ！ お医者も忙しいの。  
母 (本人は本気で言っているのだが、どこかユーモラス) 検査検査で殺される  
う！  
私 病院じゃあ死にとうても死なせてくれんの！  
母 アパートに帰る。検査検査で前より悪うなった。

私 もうっ。いちいち病院まで来るの大変なんじゃけえ。一時間かかるの、俺の家から。

母 断ってきて。

私 わがまま言わんでえや。ね。お願い。はいはい、立って立って。あっという間に終わるけえ。

私、なんとか母をなだめ、車椅子に乗せる。

母 ヘアブラシ持ってきて。リップクリームも。

私 はいはい。オシャレですねえ！

母 あんた、わたしのニトロ口持ちよるじゃろ。ニトロ。

私 検査受けたら元気になるけえ。元気ないとアパート追い出されるよ。

看護師A、急ぎ足で来る。

看護師A ああつ、ごめんなさい広兼さん！ あのね、急に検査が中止になったんです。

私 えっ、中止?!

母 ー。

看護師A ドクターがいま説明されますから。ドクター！ 笠松先生！

医者A（笠松）、来る。ずんぐりむっくり。ガリ勉タイプの風貌をしている。

私 あの、中止って?!

医者A 炎症反応が出て、検査前の数値が悪すぎなんです。（母に謝る。しかし頭は低く垂れない）ごめんね、広兼さん。採血したでしょ。血液の値がね、高いの。高すぎるの。だからちよつと検査できないの。もう少し安定してから、やることにしますから。きょうは中止。

母 ………。

看護師A （母に）カテーテル検査は中止ですって。今度ね。また。

母 ………。

私 お母さん、中止ってえや。

母 ………。

看護師A お部屋に戻ってましようか。

私 （医者Aに）あの、今度っていつですか?!

医者A またお知らせします。（半ば独り言）もう少し体調が良くならんなあ。

私 はあ……。

医者A （看護師Aに）あ。例のあれ、CTどうなりました?!

看護師A はい。あの、きのう相馬さんが……

医者Aと看護師A、私と母から少し離れた所で何やら別の患者のことを話し出す。

私、仕方なく、母の車椅子を押して病室に戻ろうとする――

母 好つかあん！

私 え？

母 (憤怒佛のように怒っている) 好かん、へらへらしてッ。あれ見んさい、人の悪口言いよるッ。

私 言っでないよ。

母 わたしのこと笑いよるんじゃけえッ。

私 笑ってないって。耳が遠いから、話がよう聞こえんだけ。

母 あんたまで人を悪う言うッ。

私 なんでよ！ 俺はお母さんの味方じゃろ。

母 (医者Aと看護師Aを見て。目が怒りに燃えて) 好かんねえッ。

看護師A、医者Aとの会話から戻ってくる。医者Aはとつくにどこかへ行っている。

看護師A ベッドに戻りましょうか。ね、広兼さん。

母 ………。

看護師A、母の車椅子を押して病室に戻る……。(母をベッドに寝かせ、点滴の用意をする……その姿が消えていく)

私 (母の様子を見ていて……独白) あれは、ちょうど一年前のこと……

(回想) 妻、明かりの中に現れる。

妻 これ、あなたに。

妻、私に近づき、封書を差し出す。

私 ん？ ……市役所からじゃ。なんじゃろ？

妻 ………。

私 (封書を開けて) ……え、え？

妻 (驚いた私の顔を見て、書類を覗く)――。

私 (軽いショックを受けて)「扶養紹介」じゃ。

妻 扶養……紹介？

私 親の面倒見られるかって。……市役所に、生活保護の申請したらしい……。

妻 っつて、お父さんお母さんが？  
私 うん……。なんも話聞いちゃうわ。

—間。

妻 どうするん？

私 (なんだか声が震えて)「扶養照会」って……。

妻 ……。

私 面倒見るのなんて無理。ていうか、いままで助けてきて、俺の借金、ほとんど親父に貸したお金なんじゃけえ。これ以上面倒見よったら、こっちも共倒れするっっちゃ。

妻 じゃ、どうするん？

私 (困って)んんん。

—間。

私 ……面倒見れんって、書くしかない。扶養できませんって。

妻 ……。

私 下手に扶養できるって書いたら、生活保護受けられんようになるじゃろうし……、そしたら親父もお袋も困るじゃろ……。

妻 ……。

—間。

私 ……あんたの、リユウマチのことも、書いちゃってええか？  
妻 え？

私 あんた働いて給料あるし。病気のこと書いちゃうかと……、アレかも……しれんけえ……。

—間。

妻 書いたらええわあね、嘘じゃないんじゃけえ。書いちゃったらええわあね。

私 正直なのが、あなたのええとこなんじゃけえ。

私 (自嘲して)フ、親父譲りか……。

妻 ……。

私 (書類を書くように親を扶養できない「理由」をつぶやく)「……私は売れない劇作家であり、収入も乏しく、安定せず、また妻は病院で総務の事務をやって働いておりますが、……リユウマチの持病があり、また子どもも中学生で、教育費がかかり、とても両親を扶養することはできません」……

妻、消える。

私 (消える妻の姿に) ねえ、嘘じゃないじゃろ? 嘘じゃないわあね。それに、  
ちゃんとした権利なんじゃけえ……

電話が鳴る。妹からの電話。舞台の別の空間に妹(典子)が現れる。(二  
人とも受話器を持たずに電話のやり取りをする)

妹 お兄ちゃん、電話くれた?

私 典子か。市役所から、手紙来たじゃろ。

妹 ああ……、うん。

私 おまえも扶養できんって書かんと、お父さんから保護もらえんけえ。俺も康子  
姉ちゃんも、扶養できんって書いて出したから。

妹 じゃけどさ――

私 嘘じゃないんじゃけえ。

妹 ………。

私 おまえ、お父さんとお母さん引き取って、静岡で(夫の)小室君や千夏ちゃ  
んと一緒に暮らせるか? 面倒見れるんか?

妹 それは……無理。

私 じゃろ? 嘘じゃないんじゃけえ。こうするしか仕方ないんじゃけえ。

妹 ………。

妹、消える。

私 ………。

電話の音。母からの電話。舞台の別の空間に母の姿。(時間は現在に戻る)

母 友昭君、家に用事があるから、あんた迎えに来てくれんね。

私 俺も忙しいんちゃ。年中病院に行けんの。

母 駄目! どうしても帰らんにやいけん用事があるぞ。

私 あしたじゃ駄目なん? あした昼に行くけえ。

母 きょうでないとしても駄目。

私 (だんだん腹が立ってきて) なんか検査があるんじゃないん?

母 書類を取りに帰らんにやじゃから、検査はイ、ヤ!

私 なんの書類? あしたアパートに寄って探してきちやげるけえ。

母 息子のあんたにも言われんことがあるぞ! ええからっ迎えに来てッ。

電話をガチャン!と切るように、母は消える。

私　　ったくもう！（独白）……じゃけど、なんだか、母さんが自殺するんじゃないかと。そんな予感めいたものが――。

私、母の病室に急いで駆けつける。母のベッドは空。

私　　（胸騒ぎがして）あれ？　お母さん。お母さん！　お母さん！！

看護師A、急ぎ足で来る。

看護師A　（怒っていて）お母さまは帰られましたッ勝手にッ。退院してもらいます！　出ていってもらいます。

私　　意味がよく……？

看護師A　熱が出て、担当の看護師が座薬を入れようとしたんです。そしたら広兼さん暴れて！　看護師を蹴るわ、叩くわ。止めに入ったあたしにまで噛みついて。これ！（ト手の甲についた歯形を見せる）

私　　噛みついた？　母が、ですか？

看護師A　（噛まれた手の甲をさすって）何度も何度も！　ギギッて。それでも止めようとしたんですよあたしは。勝手に腹立てて帰られました。あ、ドクタ―！　こっちはです！

医者A、おっとりとした足取りで来る。

医者A　（看護師Aの興奮状態に比べて、この状況にやや戸惑っている）ああ、どうも……。息子さん、でしたよね。どうぞ、こちらに。

医者A、私を椅子に座るよう促す。そこは診察室。私、医者Aと向かい合うように座る。医者Aのそばに看護師A。

医者A　（カルテを見ながら）肝臓に脾臓……、お腹に水もたまってますね。元々は貧血で、狭心症の疑いで検査入院されたんですが……。どっかに悪性腫瘍があるようで……。

私　　はあ……。

医者A　脾臓も腫れてる。肝障害もかなり進んでる。炎症反応があつて。どっか腫れてるんですね……。何か進行性の病気だとは思いますが。腹膜も駄目。汎血球（はんけつきゅう）も少なくなってる……。

私　　はあ……。

医者A　もっと検査をしなきゃなんですがね。わたしとしてはできる限り――

看護師A　（医者Aのどっちつかずの態度に、断固として）広兼さんご本人が、検査を拒否されてるんですから！　殴る蹴る……。検査どころじゃないですよ、ドクタ―。

医者A (あいまいに) フム……ねえ……。

看護師A (私に) 退院は、お母さまのご希望なんです。(医者Aに) ドクター、あれを。

医者 ああ。こんな物を。(私に渡す。ミニレター⇨便箋兼封筒。中の便箋部分に母の文字が書かれている)

私 「拝啓 院長様……」

看護師A (病気で力なく書きづらそうに文字を書く仕草) たぶん、手が震えて……それで字が……。

私 はあ……。 (少し読みつらそうに)

「拝啓

院長様、内科各先生、カンゴフ様、大変お世話に相成りました

ワガママ それぞれのご無礼おゆるしくださいます。広兼とみこは心よりカシヤしています。

退院届

大変 勝手を申してすみません

ワケ①足が冷えすぎます

家はすぐあたたまるスチームをしています

少しずつあるきます

ぜひおねがいます

自己セキニンをとります

病院にごめいわくを

おかけしません 富子」

看護師A ということですから。

——間。

私 あの、治療を受けないと、どうなりますか？

医者A (淡々と) 末期です。

私 (まったくの予想外) え——、まつき？ 末期ってあの？

医者A どうかに悪性腫瘍があるはずなんです。

私 末期って。末期って、あの、え？ あと——、どのくらい？

医者A このままほっといたら一週間。

私 いっ——一週間?! 一週………間。

——間。

私 ……………。

——間。

医者A (私をチラッと見て) 気づかれなかったんですか？

私 え？ 何を？

医者A お母さんが、こんなに悪くなる前に、気づかれなかったんですか。

私 (医者Aの言葉に小さく、しかし深く傷つく) ——。

医者A 行き来があまりなかったとか？

私 行き来って……。

——間。

医者A あの、検査を受けるのなら——

看護師A 駄目です、ドクター！ さっきさんさん話し合ったじゃないですか？

噛みつくんですよ！ 蹴飛ばすんですよ！ (手の甲を医者Aの眼前に) ほ

ら！ ほらっ。病棟の秩序が保てませんっ。赤くなって菌形が！

私 すいません！

看護師A ……。

——間。私、ふらふらと立ち上がる。

私 (あきらめて) ……あの、もしも、あの……、いや、紹介状を書いちゃって  
もらえませんか。お願いします。

私、その場を離れる。医者Aと看護師A、消える。

私 ……一週間?! 一週間。……「余命」ってたら、ひと月とかふた月とか  
じゃないんかっ。一週間しか生きれんのに、病院から追い出すんかッ。

——間。

私 ……置いてもらえんようなことしたってことか……。

私、母の病室へ。悄然と母の荷物を片づける。われ知らず涙が鼻筋をぬ  
らす。

看護師A、来る。紹介状(診療情報提供書)を持って。しばらく私の様  
子を見ている。さっきと違い、同情的になっている。母の余命が一週間  
と告げられた息子の気持ちを思いやる。本来は優しい心を持った看護師  
なのである。

看護師A あの……紹介状です。

私 あ。ありがとうございます。……大変ご迷惑をおかけしました。

——間。

看護師A ……どこかに相談に行かれたらどうです？ お母さまのこと。市役所の

福祉の相談とか。そのほうが——

私 もう生活保護を受けてるんです。

看護師A ああ……。

私、荷物をまとめ終えて。

私 信じられんです。

看護師A え？

私 人を殴ったことなんて、いままで一回もないし。

看護師A ……。

私 子どもの頃から殴られたことも叩かれたこともない。日頃は穏やかで。そりゃ腹を立てることもあるけど……人間じゃから……。

看護師A ……。

看護師A、また心を閉ざす。そっと自分の噛まれた手の甲に手を添える。

私 ……失礼しました。

私、荷物を持って病室を出る。看護師A、消える。

私 (独白) 昔、母とこんな約束をしたことがあって。私が十八歳で東京へ働きに出る前のことだ。実は、その頃住んでいた家がボロボロの家で、あまりにボロくて屋根がぐどれて(壊れて)雨漏りばかり。傘を差さねばならないほど。とうとう天井が腐って抜け落ちて。その抜け落ちた天井を見て、中学生だった妹が……

妹、舞台の別の空間に現れて。

妹 (しみじみと、しかしどこか達観して) 鍛えられるねえ、お母さん！

私 妹が、逆境を前向きに捉えるところは、父さんによく似ちよったけど。……じゃけど母さんは、お金がなくて、引越すこともままならないで、さすがにこたえたらしく……。

舞台の別の空間に母。

母 ああッ、せんないねえッ……。

母の涙。

私

……その頃の私は、思春期の迷いと物書きへの憧れが、心の中で嵐となって吹き荒れていて。親に金がないことも相まって、大学に進むことをあきらめていた。大都会への憧れだけを胸に抱いて、東京へ働きに行くことにして。まだ未来への可能性を露ほども疑っていなかった頃で……。

(母に笑顔で)お母さん、きつと迎えにいくけえ、そんなに落ち込んでえや。ね。ね。迎えにいつても、すぐ移れるように、そこに根を生やさんでおつてね。きつと迎えに行くけえ。待つちよつてね！

母

ああつうれしいねえ！ その言葉だけで元気が出たいね。

私

うん！

母 待つちよるけえね、友昭君。

母、救われたような笑顔のまま……消える。

私

……。

……………

母のアパート。

母、居間のテーブルに座っている。テーブルの下にはひっくり返して置

かれたこたつ。

私、買ってきたほか弁を手にして、来る。

私

家に用事ってなんなん？ きょうせんにやいけんことつて？

母

息子にも言えんことがあるぞ。

私

勝手に病院抜け出してから。どうなるかわかつちよるの。

母

先生が言ったぞ、退院してもええつて。

私

(カチンときて)子どもに嘘つくな！ 子どもだますな！

母

だましちよるのはあんたじゃろつ。

私

俺が何だました。

母

わたしのニトロを勝手に持つちよるじゃろつがね。

私

あれは——、医者が俺にひとつ持つちよくように言ったぞ！ 倒れたときに

母

持つてないと、危ないでしようがね！ お母さんもひとつ持つちよるじゃろ。

私

(胸を押さえて)ああつ、あんた、そねえに強い口きく人間じゃったかねえ。

私

事実を言いよるだけでしょ！ もうつ。

母

ああつ興奮したつ。ああつ苦しつ。

私

ほらつ、もうつ。(母を心配して怒りを我慢する)……大丈夫？

母

(テーブルのペットボトルをつかみ、お茶を飲む)ああつ。……ふうつ。

私

(母の背中をさする)……興奮せんこと。

母

ん……。 (またお茶を一口)

私 ほか弁買って来たから、食べる？

母 うん。

私 みそ汁飲む？

母 飲む。

私、台所へ。靴下のままで。

私 この家寒いね。底冷えがする。鉄筋じゃからかなあ？ 木の家みたいなぬく

もりが無い、綿田の家に比べて。

母 風呂場も足元が冷とうて冷とうて。

私 それって、逆に体に悪いんじゃないん風呂入っても？

母 綿田のお母さんにお米と野菜のお礼言っちゃって。(両手をスリスリすり合わせて) 感謝しまぁ〜す！ (ややおどけたようにも聞こえる。この母の憎めない持ち味である)

私 うん。

母 あんた、靴下じゃ寒かろう。スリッパがトイレにある。

私、トイレへ。

母 テーブルの下にひっくり返して置かれたこたつのスイッチを入れる。が、うまくつかない。こたつを覗き見て、こたつのスイッチをしっかりと入れる。ヒーターが赤くなる。そのこたつの枠に足を載せて温まる。

ト私、靴下を脱ぎながら飛び出てくる。

私 ひゃあつ、スリッパにウンチついちゃったよ！

母 アッハハ、なんでじゃろう？

私 自分しかおらんじゃろ。もらしたんじゃないん？

母 わたしがかね。(笑いをもらしつつ) そねえなことなからう。

私 (靴下と足の裏を見て) あああ。

母 アッハハ、あんたもウンがついた。ええことある。賞が取れる。アハハッ！

私 もうっ。(母をチラと見て小声で) ボケよるんかなあ……。

私、「ウン」の意味を考えて、一瞬動きが止まるが……

私 ……あ！ なんてこたつひっくり返して使いよるん？

母 足元が冷えるぞ。

私 ええっ?! 火事になるじゃろ！

母 火事になりやせん。

私 危ないわあね！ そねえな使い方しよる人おりやせんよ！  
母 一年以上コレをしちよるの！ ガミガミ言うなっ。  
私 ガミガミじゃない！

私、母の足をのけて、こたつを片付けようとする。しかし、母がそうは  
させまいとして抵抗して、ふたりはもみ合う。

私 手え放して！ 火事になる！

母 火事になりやせんっ。

私 言うこと聞いてえや。

母 駄目！

私 は、な、し、て！

母 ええのこのままで！

私 火事になる！ 手え、ど、け、て！

母 (怒って心底叫ぶ) この家じゃわたしがあるじじゃっ！ 命令するなあ！

私 (こちらもカチンときて、テーブルを両の手のひらでバン！と叩く) ……！

けれど私は、いままで見たことのない母の強い怒りにびっくりもする。  
腹は立つが、こたつを放し、ひっくり返ったままであきらめる。

母 (自分を「あるじ」「足らしめない何かに対して怒っている) ……。  
私 ……。

ト母、急に胸を押さえて、椅子からすべり落ちるやうに床にうずくまる。  
心臓を手でぎゅっどつかむ。トいきなり二、三度嘔吐する。

私 お母さん？ お母さん。

母 ああっ苦しっ……………。

私 大丈夫？ お母さん！

母 (虫の息で) ……友昭君、きゅ、救急車呼んで……………

母 ええっ、病院追い出されたばっかしじゃ。

母 あの病院は戻らんっ。検査検査で殺されるう！

私 んなこと言っても——

母 は、早く……………きゅ、救急車ああ……………！

私 (あわてて) ニトロ飲む？ ニトロ飲むか？

母 ……。

私 お母さん？ お母さん！ お母さん……！

——暗転。

徐々に救急車のサイレンの音が近づいてくる。……………

………  
小雪が舞う。

私、母の入院用の荷物をそろえる。

私  
（鞆の中やその周りに置いた物を確かめながら）タオル……ティッシュ……パ  
ンツ……肌着……リップクリーム……老眼鏡……イヤホン……  
ふとしたときに、思わんでもない。劇作家などやらずにいたら……。もっと  
別な自分があったのかも……。

水差し……箸にスプーン……電気アンカ……靴下……歯ブラシにコップ……  
目覚まし時計……通販で買ったらしい安い補聴器……  
あとは……そうそう、紹介状！

私、荷物を持って母の元へ向かう。

そこはB病院。母の病室。ベッドに母が寝ている。医者Bが母の診察を  
している。聴診器を母の胸に当てて。医者Bは颯爽としている。だが、  
母を「人」としては見ておらず、ただ「患者（病气）」として見ている。

母  
（猫なで声で）先生え、前の病院ひどいんですよ！ 検査検査で。殺され  
るっ。

私  
（母の妙に甘えた声に驚きと嫌悪を禁じえない）……。

母  
かと思えば、検査すると言って、せん。病室は寒いし、食事はまずいし。患  
者を馬鹿にして笑う、ニタニタニタニタっ。

医者B  
検査はしなくちゃね。

母  
ほりゃほうでしようけど。じゃけどね先生え——

私  
あの、これ、前の病院で書いてもらった……（紹介状を渡す）

医者B  
ああ。（チラッと見て、ぞんざいに白衣のポケットに突っ込む。取りあえず  
診察を終えて）きょうはゆつくり休んでください。あすまた診ましよう。く  
れぐれも興奮しないように。

医者B、病室を出ていく。

母  
（医者Bに対するのとは打って変わって怒気を含んだ声で）ようお父さんと  
似ちよるっ。

私  
はあ？

母  
やらんでええことをやるっ。

私  
何？ 何よっ。

母  
あんたがアレを見せんにやええがと思っちよった。ほんツと馬鹿正直にもほ  
どがある！

私  
渡さんじゃ、どねえな病気がわからんでしょ！ 自分のためでしょうがねっ。

母  
馬鹿正直者ッ。

私 なんなんそれ?! 自分の息子に。

母 ああつ、血圧上がったッ。

私 ——。

母 ああつ……お腹痛い……。

私、腹が立つがこらえる。

私 ……帰るよ。……もうなんつも言わん。また倒れられたら困るけえ。(しかし

薄く笑って)フ、ここ病院じゃけど……。

母 ……。

私 荷物ここ置いちよくけえ。またあした来るから。

母 来的时候に、救心買ってきて。命の母A。あれが命の綱。

私 病院おるんじやから、そんな飲んじやいけんのじやないん。

母 ええからッ。

私 ……大人しく検査受けてよ。ここ追い出されたら、次行くところないよ。(半ば  
独り言)忙しいそこから。観光ビデオの脚本も書かんにゃじやのに……。

ベッドに横になっている母は、目を閉じて休む。

看護師B、来る。点滴用具を準備して。はきはきとした態度で、テキパ  
キと仕事をすする。

看護師B お具合どうですか。点滴をしますからね。

母 (熱が出て朦朧としている)……。

看護師B ちよっとお熱があるみたい。

私 お母さん、大人しくしちよってよ。

母 ん……。

看護師B あの、先生が呼んでらっしゃいますので、診察室のほうに。どうぞ。

私 あ。はい。

私、母が大人しく点滴を受けようとしているのを確かめてから、診察室  
へ向かう。

医者Bの診察室。医者B、紹介状を机に広げて時折目をやり、パソコン  
画面のカルテを覗きながら。

私、患者用の丸椅子に座る。医者Bと私は同世代。私は、医者Bと自分  
の社会的地位の歴然とした格差をなんだか意識してしまう。

私 (独白)私は時間に縛られるのが嫌で、いつも時計をポケットに入れちよる。

その時計は、百貨で買った百円の時計だ。この医者……白衣の袖から覗く  
腕時計は、私の時計をいったい何個買えるじやろう。

医者B 原因がわかりませんね。この数値を見ると、やはり血液の専門病院に行か

れたほうが……。医大の血液内科か、中央総合病院か。

私 そこをこないだ退院したんです、検査を、その、嫌がって……。

医者B (紹介状を見て) ああ、でしたね……。

医者B、何やら考え込む。

私 (独白) 二五歳から芝居を書き始めて二十年。三十歳の頃に立て続けに賞を取り、東京のプロの劇団でも上演され、地方に住んじよる劇作家としては、がんばって稼いできたほうで。じゃけど、この医者の子、三年分の年収で、私の劇作家の稼ぎはコッパみじんに吹き飛ばされてしまっじやろう……。

医者B (紹介状を見つつ) 脾臓に腫瘍の疑い……肝臓に腫瘍の疑い……リンパ腺も腫れてる……か。

私 ガンですか？

医者B ガンでは……ないですね。(と断言する)

私 はあ……でも——

医者B やはり血液の病気でしよう。リンパ腫か……とにかく検査しないことには、手の打ちようがありませんね。

私 あの、呼んでくれませんか。

医者B は？

私 僕を。母の検査のときに。付き添いますから。時間の自由がきく仕事なんで。

医者B なんのお仕事を？

私 劇作家です……。 (書く仕事をして) 舞台の、芝居を、書いって。

医者B (あまり興味がない) へえ、そんな仕事か。この辺で。

私 ………。

——間。

医者B とにかく、あしたから検査です。できるだけやってみましょう。

私 その紹介状、コピーもらえませんか。母の病気がことが書いて…… (あるんですよね)？

医者B ああ……。んじゃ、あとで受付に預けておきますから。んじゃ、どうも。

私 それと、あの——

医者B は？

私 救心飲んでも大丈夫ですか？ あれを飲むと安心じゃって……。

医者B (まったく問題にせず) フ、気休めになるなら。んじゃ、どうも。

医者B、すでに次の患者のことに頭が移っている。

私 ………。

医者B、消える。と同時に、舞台の別の空間に叔母が現れる。  
そこはB病院の廊下。私は叔母と電話で話している。

叔母 (東京訛りで) そりゃ初期の認知症じゃないの？ 暴れたりするの。

私 認知症とは思えんけどなあ。

叔母 息子は認めたくないのよ。

私 (独白) 三津子おばさん。母さんのすぐ下の妹だ。母さんは七人兄弟でその長女。兄弟はみんな山奥の田舎を出て、東京、名古屋、大阪の大会で暮らしてる。(叔母に) 香典送ってくれてありがとう。今度お返し送るけえ。

叔母 お父さんも亡くなって、富子姉さんまで騒ぎ起こしちゃ大変ねトモ君も。うちもパパが胃ガンでしょ。発見が早かったからよかったけどさあ。あたしも死ぬかと思っちゃったわよ心配で。おまけにカズ君(私のいとこ)の所も、子どもに生まれつき障害があるでしょ。その面倒を見てやったりで、目がマワル。フツッ。この子が賢くてねえ、驚いちゃうのよ。絵なんか描かせたらピカソよピカソ！ 障害があるっていうと普通の人はさあ……

私 (傍白) おばさんは相変わらずだ。自分のことぼっかしよくしゃべる。しゃべりだすと一時間でも二時間でも……(叔母の話をささぎるように) じゃ、ありがとう。

叔母 ああ。元気になって、東京に遊びにおいでって、言って、富子姉さんに。

私 (複雑な気持ち) ん……。

叔母 お金送るからさ、十万円。大変でしょ。トモ君の好きに使っていいからさ。がんばってよ。

私 ありがとう……。

叔母、消える。

私 前言撤回。自分のことぼっかしじゃなんて——、ごめん。

私、母の病室に戻ろうとする。だが、見知らぬ男に呼び止められる。債権回収会社の男だ。債権回収会社の男はこれまでの職務上の経験から、相手方と接する際に感情的にならないように心掛け淡々としている。病院の廊下で。

債権回収の男 広兼……伴介(ぼんすけ)さんの息子さんですよね？

私 はい……。

債権回収 すぐわかった。

私 どちらさん……ですか？

債権回収 (名刺を出す) マルコー債権回収会社の者です。お父さんの、伴介さんの、債権のこと……

私 (血の気が引き、言葉が出ない) 債っ——。

——間。

債権回収 ……ええっと、友昭さんですよ？

私 どうしてここが？

債権回収 お宅に寄って、坊ちゃんですかね、教えてもらいました。

私 (カツとなつて) 息子は関係ないでしょ！ 息子はこれとは関係ないんじゃないから！

債権回収 いやいやいや、落ち着いてください。ね。どんな用件か言ってみませんか、坊ちゃんには。

私 ……。

——間。

債権回収 しかしあれですね……

私 なんです？ なんです？

債権回収 いや。お父さんの友達と言ったら、すぐに信じて、ここを教えてくださいました。育ちがいいんでしょね、素直……。今のご時世、もっと用心しないで。

私 ……あの？

債権回収 届いてますよね手紙？ 内容証明。

私 はあ……。

債権回収 手紙に書きましたように、お父さんの債権が、銀行からこちらの債権回収会社に移りました。伴介さんが亡くなられたということで、連帯保証人の友昭さんに、債権を支払う義務があります。

私 ……。

——間。

債権回収 いま、詳細がどうなってるかわかりますか。

私 なんとなくは……。

債権回収 (書類を見て。私も気になって思わず身を乗り出して覗き込む) 債権が——、債権の元金が、九百九十万円。遅延損害金の利息が十四パーセントで、遅滞金が現在……約一千万円にふくらんでいますね。伴介さん名義の土地の競売(けいばい)を七回やっていますが、九百九十万円を二百十万円に下げても売れない状態で。それもあって先日、銀行が競売を取り下げて、債権をうちの会社に譲渡したわけですが……。

私 (呆然とする) ……。

債権回収 (淡々と) これね、ほっとくと大変なことになりますよ。

私 はあ……。

——間。

債権回収 どうされるか、よく考えられて、お電話いただけますか。ね。

私 ……………。

債権回収 (同情的な笑みを浮かべて) ……フ、銀行と違ってうちはね、ひどいことしませんから。解決したい方向ですから。そのための債権回収会社ですから。

私 ……………。

——間。

債権回収 ん、この仕事が嫌になるのはこういう瞬間だ。

私 え…………？

債権回収 友昭さんが悪いわけじゃない。お父さんがこしらえた借金なもの。

私 ……………。

債権回収 でもねえ…………こればかりはねえ。

私 ……………。

——間。

債権回収 この名刺の電話番号に電話して下さい。よく考えられて。

私 ……………。

債権回収 じゃ。お願いしますね。電話。

債権回収会社の男、廊下を去る。

私 そもそも父さんがなぜ、払いきれないほどの借金を抱えるようになったのか…………

始まりはレッドパージ。公職追放。戦後の昭和二年、父さんは十八歳で税務署に就職したが、昭和五年、朝鮮戦争でのマッカーサーの原爆投下に反対して、税務署をレッドパージで蹴(くび)に。

それからは紆余曲折、民主的な活動が続けながら、小さな不動産屋を営んで、なんとか生き抜いてきて。

じゃけど、元々商売下手。子ども三人を育てていく中で借金がふくらみ、加えて人の好きで、友人の連帯保証人になったのが、運の尽き。その友人に夜逃げされて…………

当時は、バブル経済のはじける直前で、夜逃げした友人の債権を抱えた銀行が、商売下手の父にまで金を貸し付けた。父は宅地造成をする形で、連帯保証の返済分を含んだ土地購入代金を、銀行から借りた。じゃけど結局、土地

は売れずに、利息が利息をふくらませ、借金が借金を呼び寄せて……

私、悄然と母の病室に戻る。しかし、母のベッドは空。

私 あれ？ あれ？！ お母さん？！ お母さん。お母さん！ お母さん！ ええっ？

看護師B、急ぎ足で来る。

看護師B 探してたんですよ！

私 母は？ まさか？

看護師B もう帰られましたっ。病院を出られました。

私 ああっ！

看護師B 見てください、シートがべちよべちよ！ 点滴を拒否されて、自分で引っこ抜いて。こんな人ありませんよ！

私 すいません。

看護師B 何かあったら、そちらの責任ですからね。

私 何かあったらっ——

看護師B 病院は責任取れませんよっ。ご自分の責任ですよっ。

私 でも——

看護師B なんですか。お宅の自己責任でしょ。

私 (一方的な言い方にカッとなるが、ぐっと耐える) ——。

——間。

私 でも、あの、靴は？ 靴履かんにや？ 靴持ってきてないはずじゃけど。

看護師B 病院のスリッパで、タクシーに乗られました。止めたんですよ。追っつて。「何かあっても知りませんよ、帰られたらもう入院できませんよ」って。止めたんですけど。

私 やられた！ スリッパっ。スリッパかあ！

看護師B ——。

私 (半ば感心して半ばヤケになって笑ってしまって) アッハハ、こたつひっくり返して使いよる人じゃもんなあ！ アハ、アハハハっ！……………

看護師B (あきれて見ている) ……………。

……………

私、母のアパートへ。母の部屋を覗く。母は病院からの脱出に疲れきつたのか、ベッドでぐったり寝ている。私、しばし母の様子を見守る。

妻、来る。ポータブルトイレを抱えて。その手には二通の郵便物も握られている。

妻 (ポケットから領収書を取り出して) 領収……。それとポストに手紙が来ちよったよ。

私 (受け取って) ああ……。ポータブルトイレって、市役所からお金出るのかなあ……。

妻 お母さん、奥で寝ちよっての？

私 また脱出するんじゃないから病院を。それもスリッパで！ 信じれるう？！ 点滴引っこ抜いて。

妻 (心底感心して) やるねえ！

私 わが母親ながら、感心するやらあきれるやら。

妻 ンッフッ。

——間。

妻 ……変な男の人が訪ねてきたって、どういう人？

私 え？

妻 かおるから聞いたぞ。変なおじさんがあなたを訪ねてきたって。

私 ああ……。

妻 お父さんの……相続放棄……したんでしょ？

私 話したことあるじゃろ。若い頃、親父の仕事を手伝いよって、連帯保証人のハンコ押したって。その土地が売れんで残って……。その借金を、俺が払わんにゃいけんことになってしもうた……。

妻 ……。

私 (わざとどどけて) 若気のあやまち、若ハゲの始まり。ナンチャッテ。

妻 ……。

——間。

妻 じゃ、行くけえ。

私 また仕事戻るん？

妻 あたしが働かんと食ってけんでしょ。

妻、帰っていく。

私 ……。

私、ポータブルトイレを持って母の部屋に入る。母、寝ている。ポータブルトイレをベッドのほど近い所に置く。

私 (手紙を開けて見て) 督促状じゃあ……。

私、母を振り返って見つめる。……………

ト保健師がいきなり来る。市の福祉事務所の社会課（生活保護担当）から要請されて。保健師は仕事と自分の生き方が結びついた熱心さがある。

保健師 もうびっくりしちゃって！

私 え？！ だれ？ だれ……………ですか？

保健師 あ、ごめんなさい。（名刺を私に渡して）地域包括支援センターの、保健師の、石垣です。市役所の、福祉事務所の、社会課の、水原さんから頼まれました。

私 保健師さん。

保健師 お母さま、その、末期だって、お伺いしたんですけど……………。

私 水原さんって、生活保護の？

保健師 ええ、生活保護の、水原さんからお聞きして。お母さまの今後のことを、ご相談しようかと。

私 ……………。

保健師 その…………一週間ですって？ びっくりしちゃって。

私 「ほっといたら一週間」。じゃけど、全然そんなふうには見えなくて…………。

——間。

保健師（きつぱりと）すぐに介護保険を使えるようにしましょう。介護保険入ってらっしゃいますよね、お母さま？

私 あ、はい、確か。

保健師 ケアマネージャーさんに来てもらって、ケアプラン立ててもらって。介護保険を使えば、訪問看護も安く受けられるんですよ。背中を起こせる介護ベッドも安くレンタルできます。できるだけのケアをして差しあげて。いまはQOLが大事ですから。

私 キューオーエル…………？

保健師 クオリティ・オブ・ライフ。その人らしく生きるための。

私 クオリ…………じゃけど、一週間なら、この家で看取っても——

保健師 ああ、共倒れますよ！

私 共倒れ？

保健師 今までもずっと付き添ってらっしゃったんでしょ？

私 ええ…………まあ…………。

保健師 お医者の方より、もっともつと長く生きられる方がたくさんいらっしゃるんですから。

私 ……………。

保健師 でも、介護保険を受けるためには、主治医の診断が要るんですよ。要介護の認定を受けないと。

私 もう病院は行きたくないって。実は…………病院を…………脱出したんです。

保健師 脱出？

私 検査嫌がって、暴れて。自分で勝手に病院抜け出して。

保健師 まあ……。

私 病院で点滴嫌がって暴れたって言うけど、信じられんですよ僕は。全然そんな人間じゃないけえ。

——間。

保健師 そしたら、お医者にごつちに来てもらいましょう。

私 ごつちに？ この家に？

保健師 フットワークの軽い先生がいるんですよ。

私 はあ……。

——間。

保健師 病気がそうさせてるんです。たぶん。

私 病気が？ そうさせてる？

保健師 そう、病気が。その人の人格じゃなくて病気が。病気が、優しいお母さまを乱暴にさせてる。

私 (目を見開かれた思いで) ああつ、そういう考え方もあるんかあ。

ベッドに寝ている母が手を叩いて私を呼ぶ。力の弱い手の叩き方である。

私 起きたみたいじゃ。ちょっとすいません。

私、保健師を残して、母のベッドへ。

母 友昭君。寒い。バスタオル持ってきて。服。(でもええから)

私 うん。

母 先生から、うちに帰ってええって言われた……。

私 (母の嘘を受け入れて) ……うん。そう。

私、母の体に毛布を重ねて掛けてやる。

母 ああつ、お腹痛い。ん〜。……

私 トイレする？

母 ん。

私、母をベッドから起こし、ポータブルトイレに座らせようとする。母はふらふらして、自分で歩くのもおぼつかない。

私 (母のトイレを介助しながら) 病院で俺のこと、「馬鹿正直者」呼ばわりしたの、憶えちよる？

母 わたしが？ あんたを？ ハハっ、そねえなと言わんじやろお。

私 憶えてないぞ？

母 ……………。

私が母のズボンを下げてポータブルトイレに座らせようとしたとき、保健師が部屋に入ってくる。母のトイレを手伝う。

私 あ、すみません。

保健師 元看護師なんですよ。はい、広兼さん、ゆっくり座りますねえ。大丈夫ですか。

私 (独白……母から少し離れて背を向けて) 母のパンツを下げる時、あそこを毛をちよつと見てしまって。母の下の毛を見るなんて、たぶん、子どもの頃に一緒に銭湯に行つて以来だろう……なんか泣けてくる知らんけど。

母 (保健師に) あなた、だあれ？

保健師 驚かせてごめんなさい。(意識してはつきりと聞き取れるように) 市の、地域包括支援センターから来ました、保健師の、石垣です。広兼さんの、生活のいろんなお手伝いを、させてもらいますね。

母 まあ！

保健師 医療や介護や、フフフ、出来ること全部。終わったら呼んでくださいねえ。

母 そうなの。(両手をスリスリすり合わせて) 感謝しまあ〜す！

保健師 まあっ、いいお返事。ウフフ。

私と保健師、トイレ中の母から少し離れる。

私 全然一週間に見えんでしょ。実感なくて。

保健師 ……………。

——間。

保健師 どんな方ですか、広兼さん——お母さまって？

私 え？ 母……ですか？

保健師 その方の「人となり」がわかると、いい介護、いい看護に結びつくんですよ。

私 クオリティー・オブ……

保健師 さっきのね、お母さまが暴れたとかのお話があったじゃないですか。病院の、特に病棟の看護師は忙しすぎて、正直なかなかクオリティー・オブ・ライフとか考えられなくて。訪問看護にすれば、その点はずっと善くなります。

その人がどんな方だったかを、訪問看護師やお医者やケアマネなんかとも情報を共有して、QOLに結びつけたいと思ってるんですよ。

——間。

私 ……物心ついた頃にはタイプをやったましたね。

保健師 タイプ？

私 (タイプを打って活字を紙に印字する動作をしながら) タイプ。昔の、活版印刷。活字を一字一字拾って、ガツチャンツ、ガツチャンツで。

保健師 ああ、昔の、タイプ印刷。働いてらっしゃったんですね。当時でいう職業婦人。

私 冬はあったかいかけうどんをふうふうすりながら、夏はタライの氷水に足突っ込んで、一生懸命タイプ打ってたって、よく話してて。組合運動もしちよったらしい。

保健師 へええ。

私 姉と僕と妹と、子ども三人育てて。妹が生まれてからは、父の不動産屋を手伝いながら、印刷会社から下請けの仕事をもらって、家でタイプ打ってました。あと、親子劇場とか、母親運動とかもやってました。フツツ、気ままというか気まぐれというか、家で将棋なんかやってたら……

保健師 お母さま、将棋が指せるんですか。

私 (笑顔になって) 弱いけど。子どもの僕と将棋して、負けたら、「アアッ好きんっ！」って、グチャグチャツって将棋の駒を引つかきまわして、はぶてて腹立てて。

保健師 ンフフッ。

私 カラオケも好きでしたね。美空ひばりとか。父ともよく一緒に行っていました。カラオケ。それと、そうそう、中年になってから社交ダンス始めて。結構通ってたみたい、ダンス教室に。

保健師 社交ダンスを！ ほうですか。母親運動とか、いろいろやられてたんですね。へええ！(書類の端に熱心にメモする) ……

私 (独白) 父さんと一緒に日本労働健康党の黨員じゃったことや、ましてや借金まみれになっていることは、話せなかった。人となりを知りたいって言われても……。市役所の耳に入るのが怖かったし……。

保健師の携帯電話が鳴る。

保健師 あ。ごめんなさい。(携帯に出て) はいはい、もしもし。あ、はい、お疲れさまですう。——あああ、はいはい！ ええーっ。そうっ……。んん、わかりました。(私に) すいません、急に別の所に行かなきゃならなくなっちゃって。お母さま……大丈夫ですかね？

私 大丈夫です。はい。なんとかか。

保健師 すいません。お医者の方には、なるべく早く来てもらうように連絡入れとぎますから。すいませえん、それじゃ。(母に。声を張って) 広兼さあ、急なんじゃけど、失礼しますね、ごめんなさい。

母 はい。

保健師 (携帯に) あ、もしもし！ 十五分——十分で行きますから。(私に) 失礼します。ごめんなさい。(あわただしく去っていく)

母がまた手を叩く。

私 終わった？

母 出なかった。

母をポータブルトイレから立たせ、ズボンを上げ、ベッドに座らせながら……。(ポータブルトイレの背もたれに隠れて、ズボンを履かせる様子など観客には見えない)

私 きょうなんの日かわかる？

母 はあ？

私 俺の誕生日よ。わかる？

母 わかるいね。……………何歳？ 四十……

私 四十四。

母 そねえになるかね？！

私 生んでくれてありがとね。育ててくれてありがと。

母、ベッドに座って。

母 鞆取って。

私 カバン？

母 その。横の。ピンクの。

私 (鞆を取り、母に手渡す)

(鞆の中を、そこそこかき回しながら) あんたを生むときは、きょうよりもうと寒うて、雪のじゃんじゃん降る日じゃった。体中、玉の汗をかきながらあんたを生んだんじゃけえ。外は雪がどんどん降るのに、汗がだらだらだらだら流れて。もうう、これ以上力が出んってぐらい踏ん張って、いきんでっ。

私 耳にタコ。

母 うれしいっ。生まれてよかったア！

私 生んでよかったア！……じゃないぞ？ (小声で) やっぱボケよるんかなあ……？

母 (耳に手を当てて) はあ？

私 なんでもない。独り言。

母 (財布から一万円札を取り出して、鞆の中突っ込んであった折り目の入ってしまった封筒の、その折り目を直してお札を入れて) はい。

私 ありがと。本でも買おうかな。

母 ああつ、うれしいうれしい!

母、ベッドに横になる。

私 (独白) 赤ん坊の私を生むときの、雪の降る寒い日の、母さんの、玉の汗の話を何度も何度も聞かされてるうちに、赤ん坊の私が、その母さんの姿を、ちゃんと見ていたような……、そんな記憶があるような……。

母のアパートの固定電話が鳴る。私、電話に出る。

私 もしもし。はい? はい。広兼です……。え? もしもし? もしもし? あ、はい、山本さん……。? ……広兼……。伴介の……。息子ですけど……。——ええっ?! や、いま初めて聞きました。それは——、申しわけありませんっ。や、でも、もう死んでますから。だれから?

私 (受話器を手で押さえて) 山本って人。お父さんが借金しちよるみたい。お金返してくれて。八十万。

母 ああ、障害者の人じゃ。お父さんが借家の世話を熱心にしちやげたんじゃけど……

私 (嘆いて) なんでそねいな人からお金借りるん!

母 (半ば投げやりになって) それだけお金に困っちゃったぞっ。

私 (電話に) あの……。いや、申しわけないんですけど……。お金は、払えません。——はい。いやでも。や。ええ。ええ。……。でもですね、私は関係ありませんから。——息子じゃって言われても。相続放棄しますから。手続きしてますから。払えません。ほんつとうに申しわけないんですけど。ええ。ええ……。 (心を鬼にして) ほんとに払えませんからっ。ごめんなさい。ごめんなさい。失礼しますっ。ごめんなさい。

私、電話を切る。

私 もう嫌じゃあ。(亡き父に向かって) なんで! なんで、あつちからもこつちからも借金するんか! 馬鹿たれがッ。

母 ……。

また電話が鳴る。

私 わっ！ また。

電話が鳴る。しばらく電話に出ない。

私 (根負けして受話器を取る) ……もしもし。え？ はい。はい。……ええ。知ってますけど。——え？ 息子には関係ないでしょ。

母 だれ？

私 (受話器を押しえて) 河上さん。お父さんの友達の。

母 ありや借金友達じゃ！ 類は友を呼ぶ。お金貸し合ったり、保証人になり合ったり。

私 なんなん、借金友達って？！ 俺にお金貸せって言いよるんじゃけどこの人！

母 (胸の前に手で×印を書きながら) 貸すことない。貸しちゃいけん。お父さんが心臓のペースメーカーで入院しちよるときも、お金の催促に来る人なんじゃけえ。あんたは近づきさんな。

私 (電話に) ……あの、もしもし。——や、そういうことはできませんから。父と私は全然関係ないですから。——いや、母も病気で話せません。もう電話して来ないでください。——来られても無駄ですから。来ないでください。来、な、い、でっ。

私、電話を切る。

私 ホンっと嫌じゃあ！

またまた電話が鳴る。

私 しつこいのうっ。

電話が鳴る。何度も。

私 (半泣きになって、母に) なんで電話番号わかるようにしちよかんのよっ。

(ナンバーディスプレイに)

ふたりとも電話に出ない。電話はしつこく鳴る。  
ト母が無理に体を動かして受話器を取ろうとする。私は見かねて受話器を取る。

私 ……もしもし？ (ホッとして) なんじゃあ、おまえか。(母に) お母さん、典子じゃ。

舞台の別の空間に妹の典子が現れる。

典子 長電話じゃねえ！ それになかなか出んし。なんなん？  
私 いろいろあるぞ。替わるけえ。

母、典子と話す。

典子 お母さん、どんな？ 少しは元気になった。

母 もう病院には行かんで大丈夫。お医者ももうこんでええって言いよっちゃった。  
私 (その嘘に、母をじっと見てしまう)……。――。

典子 ホントなの？ もうっ、お兄ちゃんの言うことよう聞いてね。

母 怒られてばっかしじゃ。

私 怒ってないじゃろ。

母 ハハハっ。千夏ちゃん元気かね？

典子 千夏に、替わる？ (部屋の奥に) ちーちゃん、おばあちゃんよ！ 電話出て……………

母 ちーちゃん、おばあちゃんよ。わかる？ 広兼のおばあちゃん。……………

私 (独白) 父さんが死んだあと、借金の書類の山を整理してて、父さんが、妹の夫の両親から四十万円も借りてたことがわかって。(亡き父に) それ、しちやあいけんじゃろ、娘の嫁ぎ先からお金借りちゃあ！ (独白に戻って) ……じゃけど、その借金を返す余裕もいまの自分にはない。(心の中で妹の義理の両親に) ホントト申しわけありません。(また独白) 典子には、すまないと思いがらも、そっちでなんとか解決してくれと頼んだ……………。妹と(夫の)小室君の夫婦仲が心配じゃった。

妹 じゃあね、元気でおつてねお母さん。今度千夏と一緒にそっち行くけえ。

妹、消える。

私 次の日の昼のこと……………

医者C、来る。白衣。看護師Cとともに。医者Cはどっつきにくくはな  
いが、プライドの高さが感じられる。

医者C (カルテを手に持って) ……お母さん、前に診察に来られていますね。

私 え？ そうなんですか。

医者C 続けて受診するように言ったんじゃけどわたし。(以前来院したときに検査した母の血液検査報告書の紙を見て) かなり数値が悪いね。赤血球も白血球も。基準値以下。(血液検査の紙を私に渡す)

私 (まじまじと見て、愕然として) ホントじゃ……………。じゃ、このときちゃんと

治療受けてれば、もしかしたら……？

医者C それはなんとも言えんけど……。

——間。

私 (紹介状を渡す) あの、これを。病院行くのが嫌じゃってわがまま言ってる。

前の病院も検査が嫌で退院したんです。

医者C 診察しましょう。

医者C、看護師Cに指示を出しながら母の元へ。母に体の具合を尋ねたり、体温を測ったり、脈拍を調べたり、血圧を測ったり……

診察中に、妻、来る。

妻 こんなときに悪いんじゃないけど……

私 え？

妻 ちょっと話が……。

私 あれ？ 仕事は？

妻 あなた、午後から相談に行くんでしょ……司法書士さんに？

私 ああ……うん。

妻 それまで交代しようと思って。三時間ほど休み取った。

私 悪かったね、忙しいそに。

妻 それはええけど……。

私 (妻の声の調子に敏感に懸念を感じて) ……何、話って？

——間。

私 何……？

妻 ほら、あなた……いつか……言いよったでしょ……(言いよどむ)

——間。

私 何？ なんなん？

妻 形の上でじゃけど……離婚……したほうが……ええんじゃないかって。

私 ……。それも考えんにやかって……。

妻 うちの親も心配しちよるほ。あなたのお父さんの……借金のこと……知っちよるみたいなぞ。

私 なんで？ なんで知っちよってん？

妻 あなたエッセイに書いたでしょ、ニチニチ新聞に。わざわざそれ、知らせに来る人がおってぞ。

私 (カッとなって) 田舎もんじゃなあ！

妻  
——。

借金のことも書いたけど、あれは——、俺と親父の、なんちゅうか、父と子の関係っていうか。借金のことが書きたくて書いたんじゃないそつ。親父は親父なりにがんばって——がんばったんじゃないけど、どうにもならんで死んだって。借金もあったけど、わしを育ててくれた。目に見えん財産もいっぱいもらったって——。なんで借金のことばっかし言うんかのお。いちばん大事などこを読み取らんのか！

妻 (すでに感情が高ぶって涙が込み上げていて) そういう読み方しかできん人がおってそ世の中には。全部が全部、あなたの言いたいことがわかるわけじゃないそつ。

私 自分の田舎のことになると、すぐかばうつ。

妻 かばってないでしょ！ あなたの味方でしょうがねあたしはっ。

妻は言葉より先に涙のほうが出る。私はいつもそれを氣遣い、妻を怒らせないように、心配させないようにいちばんに心を砕いてきているのだが……。

私 (腹は立つが)ごめんっ……。

——間。

(ところで、私が自分のことを「わし」と言うとき、それはいちばん元の、素の自分の感情が出るときで、幼い頃、方言で自分のことを「わし」と呼んでいた名残りでもある)

妻 ……お母さんは？

私 部屋で先生に診てもらいよる。

妻 (母のそばに行くこうとする) ……。

私 司法書士に——、よう聞いてみるから。

妻 ……。

私 離婚のこと。

妻、母のベッドのそばへ。打って変わって明るく医者や母たちに挨拶をする。

妻 お世話になります。ありがとうございます。

母 (手を伸ばして) ああ、時江ちゃん！ 来てくれたぞ？ 先生、息子の嫁です。とっても優しいほ。

医者C (診察しながら軽く会釈する)

妻 (深く頭を下げる) よろしくお願ひします。(看護師Cにも) よろしくお願ひします。よろしくお願ひします。(何度も頭を下げて。そして笑顔で母の手を

取る)

母 (妻の手を笑顔で握り返す)

私、妻の様子を見ながら。

私 (独白) 妻の親は、結婚前に、人に頼んで私のことを調べさせた。でも、世間は狭い。その調査を頼まれた人が、たまたま父さんの知り合いで。家で、父さんと話しているところに偶然出くわした。

「広兼さんの息子さんなら間違いないでしょう！」

父さんは借金もあったが、根は正直者で信用があった。不動産協会の支部長を務めたことも。

あのときもっと踏み込んで、探偵でも雇って、父さんの身元を、借金や労働健康党のことを調べちよつたら、田舎暮らしで保守的な妻の親は、結婚を許さんじゃったじゃろう。そしたら妻も、こねえに……

母、看護師Cに腕や顔を拭いてもらっている。看護師C、親身な笑顔で。

看護師C 気持ちええでしょ？ 体を清潔にしとかないとね、病気に負けてしまいますけえねえ。

母 (両手をスリスリすり合わせて) 感謝しまあ〜す！

妻 (ほがらかに笑う) ンフフ！

私 (このほがらかな笑い声が私は好きなのだ) ……。

看護師C (一生懸命、母の体を拭く) 素敵なお嫁さんがおられて、広兼さんは幸せね！

母 はいっ。幸せせ〜。

私 (医者Cと看護師Cを見て……独白) ここに、人に喜ばれる仕事がある。人の役に立つ仕事だ。それに比べて、わしの書く芝居は……どうなんじゃろ……

医者C、私のそばに。

医者C (カルテとにらめっこして) お母さん、緩和ケアに入院できるようにしましょう。わたしの元勤めちよつた病院なら、ちよつとは融通きくから。わたしの名前出してもいい。保健師にも言っとく。ね？ そうしましょ、緩和ケア。

私 緩和ケア。

医者C 息子さんが付きつきりで看病もできんでしょ。痛みもあるでしょ。痛みのコントロールも緩和ケアならできる。

私 僕はええけど、母がなんて言うか……

母、看護師Cに髪をどいてもらっている。

看護師C　どんなときもオシヤレでないかねえ。

私　(母のそばに来て)お母さん。優しい先生のおる、優しい病院に行かんかね？

(看護師Cを意識して)優しい看護師さんがいっぱいおる。

母　死んでも病院は行かんっ。

妻　お母さん。

私　死んだら病院にも行かれんぞ。

看護師C　病院は広兼さんを助けてくれるのよ。

医者C　広兼さん、痛くない。検査もしない。緩和ケアだから。

母　嫌じゃ。

私　またあ……！もうっ。

——間。

妻　(私に)ねえ、時間大丈夫？

私　お母さん。自分のためなんじゃけえ。ね、よう考えちよって。ね。優しい優しい病院じゃから。

母　絶対、イ、ヤ。(胸の前に指で×印を書いて)病院は行か、ない！

私　(ため息)……………。

看護師C　(ほぼ同時に)あのね、広兼さん……

妻　(ほぼ同時に)お母さん、じゃったらこうしたら……

医者C　(ほぼ同時に)緩和ケアだから……検査はしない……

医者Cや妻たちが母を説得する。

私、あきらめて司法書士の事務所へ向かう。母たち、消える。

私　(独白)せつぱつまって……私は自分で書いた広兼家の家系図と、これまた

苦労して調べた親の借金リストを携えて……

そこは司法書士事務所。

私、机を挟んで司法書士と向き合って座る。司法書士は自分の言葉に自信を持っている。私の書いた家族相関図を見て。

司法書士　……つまり、お父さんが亡くなられて、その借金があり、相続放棄をする。お父さんの兄弟はみんな亡くなられて……ん？ 姪御さんが二人おられ

ますね。ますいなこりゃあ……。

私　え？ ますい？

司法書士　相続放棄するにしてもね……借金が姪御さんのところに。

私　……………。

司法書士 ん、九百九十万円の連帯保証債務があるんですね。お母さんにも約七百万円の借金がある……

私 いちばん心配なのは……婿養子なんで、妻の家に迷惑をかけられんです。

司法書士 あなたには、財産があるんですよね？

私 財産つても、妻の家族が住んじよる家じゃし。あっちの父親が亡くなって、

婿養子なんで、綿田の家とか田んぼとかに自分の持ち分が……

司法書士 そしたら、そのあなたの持ち分が差し押さえに——

私 そりゃ困るつ。ぜったい駄目！ 妻の家族のモンじゃから。

司法書士 財産がある場合は、自己破産をしても、破産管財人によって財産をお金に換えて、そのお金を、債権者に配ることになるわけで。それが嫌なら、ご家族にあなたの持ち分を、(家系図を見て人数を計算して)えーと……六分の一を、ご家族に買い取ってもらって、現金に換えて……

私 やあ、困ります！ そんな綿田の家に頼めん。

司法書士 しかし、法律はそういうもんですから。

——問。

司法書士 念のため言いますが、自己破産は最後の手段です。

私 はあ……

司法書士 自己破産もできますが、官報にも載りますよ。

私 官報……？

司法書士 裁判所の、官報。

私 ………。

司法書士 ま、ほとんどだれも見ないけど。

私 ………。

司法書士 それと、財産がある場合、裁判所の費用が二十万円から五十万円かかります。それと、わたくしどもの費用が十五万円ほど……

私 え、そんなに……

司法書士 (自信を持って言い切る)それに、相続放棄はもめる。この姪御さんに迷惑がかかる。

私 て、言われても。相続放棄して、自己破産するしか……

司法書士 ………。

——問。

私 いっそ、妻と離婚したほうがええんかなって——、いや、書類上のことじゃけど。離婚はしても一緒に暮らして……借金だけは、妻に迷惑がかからんよ  
うに——

司法書士 (強く言い切る)覆水盆に返らず！

私 え？！

司法書士 借金のための離婚はしないがいい。覆水盆に返らず。そんなことでも意味がない。あなたの借金はあなたの借金で、奥さんは連帯保証人でない限り、支払う義務はないんだから。

私 はあ……。

司法書士 (家系図を見て) 中学生の子どもさんもおられることだし。

私 ………。

司法書士 離婚などしないがいい。僕の経験上。

私 はあ……。

——間。

司法書士 (じっと口を閉じる) ………。

私 ………。

司法書士 (口を閉じたまま) ………。

私 え？

司法書士 (腕時計を見る) ………。

私 え？ ——あ、もう時間？

司法書士 ………。

私 ありがとうございます。

私、無料相談の三十分があつという間に経つたので、そそくさと書類をまとめて司法書士事務所を出る。司法書士、消える。

私 はあああああ。……結局、どねえしたらええんかわしは！

私、しばらく手で額を押さえて立ち尽くす。……

ト私を待ち構えていたように、債権回収会社の男が現れる。

債権回収 どうです、目処は立ちましたか？

私 え？ あ。はい。——いや、あの……

——間。

私 考えて……みたんですけど……

債権回収 はい。

私 自分としては……精一杯のところ……ホント、死ぬまで、い、一万円、一万円ずつ、毎月払うんで。それで……なんか——、なんかならんもんかなあって……

債権回収 (失笑) アツハ、一万円ずつ？ ハハハっ。それって九百九十ヶ月？ 払い終わるのいつたい何年後ですか？ アツハハ。

私 ……。

途中で制服姿の息子が学校から帰ってくる。学生鞆にテニスラケットを入れたケース。子どもなりに何かを察して、陰に隠れてふたりを見る。

債権回収 広兼さん、あのね、いいお知らせです。

私 え？

債権回収 うちの会社のほうで検討会議がありました。元金の七十パーセントをこちらが放棄します。残りの三十パーセントを、一括払いで、払ってもらって、友昭さんの連帯保証人の債務をチャラにして差しあげます。

私 チャラ？ チャラって？

債権回収 ゼロに。なしに。九百九十万円の三十パーセント——三百万円で解決するってことです。

私 (にわかに信じがたい) ——。

債権回収 わかりますか。解決金三百万円。遅延損害金なし。利息も放棄。ね、破格の条件でしょ。(会社の) 上のほうもね、早く債権を回収して終わらしちゃいたいですよ。これが本音。解決してしまいたいです。(書類を鞆から取り出して私に渡して) win winです。ね。

私 (必死に聞く) それって、ホントの——、ホントの話ですか？

債権回収 ええ。こんないい話、この先ないですよ。

私 ……。

債権回収 それとも、一万円ずつ払いますか。

私は提示された条件を奇跡のように感じる。しかし即答できない。黙り込んでしまう。……………

債権回収 ……二週間、お時間をあげますから。

私 ……。

債権回収 三百万。一括で。

私 ……。

債権回収 良いお返事お待ちしていますよ。(思い出して) フフ、毎月一万円……………。

債権回収会社の男、去る。

私 (光明を感じて) んうあぁ三百万……………三百万かぁ。

陰で見ていた息子、出てくる。

息子 あの变なおじさんじゃ。

私 (動揺を取り繕いながら) おおっ、かおる。……………部活はもう終わったんか？

息子 ウン。おばあちゃんは？

私 お母さんが付いちよる。

息子 早く元気になるとええね。

私 うん。でももう……長くないかもしれん。

——間。

息子 ……お父さん、大丈夫？

私 ーん——。

息子 ホントに？ なんかあったら、黙っちゃらんで、オレにも言ってえや。

私 (年端もゆかぬ息子の気遣いに思わず熱いものが込み上げて) 絶対おまえには、迷惑かけんようにするけえ！

息子 ー。

私 連帯保証人なんかなるな。な。たとえ親でも。親友でも。な。父さんが死んだときは、相続放棄すればええから——。

私はそれまでのいっぱいだった感情があふれて、はからずも息子の前で涙ぐんでしまう。息子はある程度事情をわかっているのか、黙って父の背中をさする。……

母のアパート。母と妻。

母、ベッドに座ってかぎ針で毛糸の編み物をしている。編み物は得意なのだが、いまは一つの物を編み上げるつもりもなく手すきびに指を動かしている。

妻 お母さん、何か食べられます？ 少しでも精付けて……

母 ええから、時江ちゃん。座って。こたつに当たりんさい。

妻 でも、何か食べないと。ヨーグルトしか食べべちよっちゃ(ないでしょ)……うわっ、向きが反対！ アハハっ。これ、ここに足載つけるんですか？

母 あったかいよう！

妻 アハハっ、ナイスアイデアお母さん。ンフフ。

母 布団も、ほれ、スチーム(布団乾燥機のこと)つけて寝るとあったかい。朝までぬくぬく。病院とは大違い。時江ちゃん、あんたも家でやってみんさい。アハハ。うち、布団乾燥機ないから。ウフフ。

妻 スイッチを入れて、こたつのひっくり返してあるテーブルに座る。テーブルの下にあるこたつの枠に恐る恐る足を載せる。

妻 ……ほんと、ぼかぼかする！ へええ。

母 アハハ！ 友昭君はすぐ怒るけど。

妻  
ンフフ……。

——間。

母  
友昭君、どう？

妻  
（少し恐れを持って聞き返して）え？ どうって……何がです？

母  
仕事。お芝居。

妻  
ああ。（ペンを動かす仕草）毎朝こつこつ。まじめに。

母  
ほうかね。昔は、夏休みの宿題も、ギリギリまで追い込まれんとせん子じゃったけどねえ。

妻  
知り合いの照明家の方から……

母  
しようめいか？

妻  
舞台の、明かりの仕事をやっちよる人から、観光名所のPRビデオの脚本頼まれて、締め切りが近くて大変みたい。あと、児童劇の上演料が入ったって喜んでました。それと、ニチニチ新聞のエッセイも書きよるし。

母  
ハハッ、エッセイにいろいろ書かれて困りよるんじやない？

妻  
まあ……、正直なところが友昭さんのええところじやから、ンフフ。

母  
アハハ。

妻  
本人は年取って体力が落ちて、前より書けんようになったって言うけど。

母  
ああっ、友昭君のお芝居が観たいねえ。あの子は、徳原（とくばら）家の血を引いて才能がある。お話をつくる才能が。

妻  
ウフフ、お母さんの、お母さんも、お話が上手じゃったとか。

母  
村の人気もんじゃったよお、エッヘヘ！ 昔は、田んぼの畦普請とかするでしよ？

妻  
畔……普請？

母  
田んぼの畔のくどれたのを、村の衆が集まって、作り直すぞ。そうするとみんなは作業でえろうて、無口になるんじやけど、わたしの母は、指が曲がってそねえな作業は向かんのじやけど、お話がおもしろかったけえねえ。「徳原さん、あんたあ仕事はせんでええから、なんかおもしろい話でもしてちょうだい」って、みんなからせがまれて。じゃけえ作業はせんで、おもしろい話を次から次にこきえて、みんなを喜ばしよったの。

妻  
へええ！ お話を、その場でつくって？

母  
そう。それがまたおもしろいぞ。みんなが腹抱えて笑うんじやから。「徳原さんの話を聞きよったら、おもしろうてちっとも作業が進まんねえ！」って。ンフフ！ なんか、「男はつらいよ」の寅さんみたい。

母  
ほうほう、女寅さん。作業は下手クソで役には立たんでも、そういう別のやり方が、昔はあったぞ。みんなの人気者。

妻  
ンフフ、素敵っ！ 素敵なおばあちゃん。

母  
エヘヘっ、素敵素敵い〜！

——間。

妻 ……友昭さん、お母さんのこと大好きですよ。褒められたくて芝居書きよるんじやって、いつか言っていました。

母 へえ……ホントにいい。

妻 いつじやったか、あたしが、なんのために芝居書きよるんって聞いたら、なんのためかはわからんけど、お袋さんを喜ばしたい。褒められたいって。

母 ほうかね。友昭君が……。

妻 あれでしょ、友昭さんが小学校ん時に、ソフトボール大会でサヨナラ2ランホームラン打ったときに……

母 ああ、ああ、あつたねえ！ 学校の外の川まで球がポーンって飛んでった。

妻 お母さんが、飛び上がったって、泣いて喜んでくれたって。あれがいちばんうれしい思い出なんじやあ……って。

母 (毛布の端で水漬をぬぐう) ……。

——間。

母 ……迷惑かけてないかねえ？

妻 優しくしてもらってます。

母 わたしが。

妻 え、全然全然！

母 よかったあつ。

——間。妻、癖で、指先で頬を軽くつねったあとで。

妻 ひとつ聞いてもええですか。

母 ？ 何？

妻 友昭さんが、その……うちに……その……

母 何？

妻 うちの……婿養子になって、来て、もらったこと……、お母さん、その……どう……思っちゃって、かなって？

——間。

母 婿養子に来てもらいたくて結婚するんじや嫌じゃった。

妻 ——。

母 じゃけど違うじやろ、時江ちゃんは。

妻 はい——。

母 見ちよったらわかるぞ。友昭君が大好きで、結婚したんでしょ？

妻 はい……、大好きで……、結婚したんです。

母 じゃったら、グッ!

妻 (胸に熱いものが込み上げて)――

――間。

母 (笑顔を残したまま、ぽつりと) 緩和ケアに行くかねえ。

私、車椅子を押して来る。

妻、私を出迎える。

私 実は……頼みがあつて……

妻 (心底嫌がつて) もう電話には出んからあたし!

私 え、何?

妻 あなたのおらんときに、電話があつたぞ。お父さんに貸したお金返してくれつて。何度も何度も。

私 もしかして、ちょっと言葉が……ロレツが……不自由な人?

妻 ようわからんけど、そんな感じの人。もう絶対電話には出んけえ!

私 出んでええよ時江ちゃんは。……悪かったね。

――間。

妻 もう行かんにゃじゃ。

私 仕事?

妻 きょう中に準備しちよかんといけん書類があるぞ。

私 無理せんでね。ぼちぼちやってよ。ぼちぼち、ぼちぼち。

――間。妻、指先で軽く頬をつまんで。

妻 ……相談うまくいった?

私 ああ……、うん。あとで、話すわ。

妻 そう……。頼みつて?

私 うん。それも……あとで。夜にでも。

妻 ……。

私 お袋さんは?

妻 さつきからちよつと熱が出て。

私、母のベッドへ。母の額に手を当て、それから母を車椅子に座らせようとする。母、熱のため朦朧としてふらつく。妻、手伝おうとするが……

私 ええよ。仕事に行き。

私、なんとかひとりで母を車椅子に乗せる。  
妻、しばらくじっとふたりを見てから、出ていく。

私、母の車椅子を押し歩いて歩く。……………

……………  
そこはD病院。規模の大きな病院である。看護師や病院職員や病院出入りの業者や患者たちが忙しげに立ち歩く。私、緩和ケア病棟へ。探しながら向かう。

看護師D、出てくる。私に気づき、呼び止める。笑顔も愛想もなく。

看護師D 広兼さん……ですよ？ そちらじゃないですよ。

私 でも、緩和ケア病棟って……

看護師D 満室で空きがないんですよ。

私 でも、すぐ入れるって、聞いて——

看護師D (つつけんどんに) 緩和ケアは、何人も待ってる患者さんがいらっしやるんです。広兼さんは、あちら。内科病棟の六階の六人部屋。

私 ……………

看護師D あ、入院の手続き済まされましたよね？ あれでしたら、高額療養費の手続きをしてくださいますね。(私に書類を渡して) あと、これにサインを。

私 あの……治療費って……タダのはずなんじゃけど。

看護師D タダ?!

私 その……生活保護で……

看護師D 聞いてませんよ全然。

私 確かめてもらえませんか。福祉事務所から連絡がいつちよるはずなんですけど。

看護師D ……とにかく、内科病棟に。あちら、右曲がって。エレベーター使ってください。

私 はい……。

看護師D、去る。私、方向を変える。母の車椅子を押しながら。

私 いまの看護師からもらった「入院診療計画書」は、殴り書きで字がめっちゃ汚のうて。こりやミミズがのたうちよるんか?! 母さんの病気の原因を知りたいのに、判別不能。受付でもらった入院案内書には、「良質で、適正で、安心できる医療を提供します」……て書いてあるのに。

けど……六人部屋かあ。(車椅子の母に) ちょっと我慢してえや。緩和ケアに移れるはずじゃけえ……。

母 ……………

そこは六人部屋の母の病室。割り当てられた母のベッド。サイドテーブル

ル。丸椅子ひとつ。遮蔽式カーテン。冬の夕方遅く。  
私、車椅子から母をベッドに移す。母はベッドの端に腰かけてひと息つ  
くが……やおら立ち上がろうとする。

私 何?! どうしたん?

母 (私の腕にすがって立って) 足を鍛えんにやあね。足が弱まると駄目じゃけ  
え。

私 (母を支えて) 大丈夫? ふらふらしちよるじゃんよ。

母 大丈夫、だいじょーぶ。

ベッド脇で私にすがって母は足踏みを始める。弱弱い足取り。

母 いち、に、いち、に。いち、に、いち、に……

私 (母を支えて) いち、に、いち、に……

母 いち、に、いち、に。いち、に、いち、に……

私 (一緒に足踏みをして) いち、に、いち、に。いち、に、いち、に……

母 (鼻を赤くして涙ぐみ、けれど笑顔で) 病気になったけど、あんたと一緒に  
おれてよかったあ!

私 (やるせなく微笑む) フフ……氣い抜くと、こけるよ。

母 ああつ、いち、に、いち、に。いち、に、いち、に……

私 いち、に、いち、に……

ふたりの足踏みがいつしか社交ダンスみたいになって。

私 (おどけて母とダンスを踊るように、母の手を高く取り腰に手を回して) ア

ン、ドウ、トワ、アン、ドウ、トワ。アン、ドウ、トワ、アン、ドウ、トワ

……

母 ハハハ……。こうよ、こう。スロースロー、クイッククイック。スロースロ

ー、クイッククイック。ハハハ……

私 さすが。スロースロー、クイッククイック。スロースロー、クイッククイッ

ク。……

母 ハハハ、アハハハっ!

母と私のラストダンス。……

トいきなりベッドを仕切っているカーテンが乱暴に開く。

看護師Dが来ていた。不機嫌な雰囲気。食事を載せたトレイを持って。

看護師D お食事、どうぞされます?

私 あ、僕が。します。

看護師D (私だけをカーテンの陰に呼ぶようにして) あの、ちょっと……

私 (察して看護師Dのそばへ。母をベッドの端に座らせて) はい？

看護師D 実は……ウンチが出てないみたいで、広兼さん。お腹が異常に張ってるんですよ。

私 ほう……ですか。

看護師D あとで処置しますから。お食事が終わったら声かけてください。

私 処置って？

看護師D 指でかき出します。(去る)

私 ………。

私、母をベッドの上に座らせる。母はまただるさうになる。

私、ベッドの上に食事の準備をする。おかゆとおかず。母は自分で一口、二口食べる。気力に乏しく、非常にゆっくり。

母 ………。

母、ぐったりとなる。

母 もう、ええ。いらん。……。

私 張り切りすぎたかな……。

母 ………。

私 ホントにもうええの？

母 いらん……。

私 (仕方なく食事を片付ける) ………。

——沈黙。母の苦しい息遣いだけが聞こえてくる。……。

私 水飲む？ ところの水あるよ。

母 普通のでええ。

私、ペットボトルの水を水差しに入れ、母に飲ませる。

母 アアッ！ 生き返るっ。水がいちばんおいしい！

とは言うが、母はそれほど水を飲まず。私、水差しを置く。

——また沈黙。母はぐったりとして。

私、母の食事をあきらめる。脇の丸椅子に座り、原稿を広げる。しばらくうつむいて書く。……。

母 ……何を書いちゃうの？

私 ん？ ……お父さんが火葬場で焼かれよるときに、待合室の窓ガラスに小鳥

が突っ込んできて、ぶち当たって死んだんちゃ。すんっごい音立てて、ドンッ！って。透明なガラスがわからんかったみたい。

母 そねえなことあったかね？

私 何言いよるん！ お母さん熱出して、お父さんの葬式出られんかったあね。

母 ………。

私 ちようど、千夏ちゃんの話をみんなで聞いちよるときで。ドンッ！って。見たら、窓ガラスの下に、青い小鳥がひっくり返って死んじよった。みんなが、「この鳥、お父さんの生まれ変わりじゃー！」って。ホント、みんながみんな声そろえて。お父さんが、みんなの話を聞きとらなつて、「俺も仲間に入れろお、仲間外れにするなあ」って、飛び込んで来たんじやつて。じゃけど、ハハ、ドジじゃから、ガラスが見えんでぶち当たって、また死んでもうたつて、ウツフフ！ みんなで大笑いしてから。

母 ほうかね、小鳥が。

私 ……あとで、その小鳥、千夏ちゃんとかおるとで、火葬場の隅に埋めてやつた……。

母 (力乏しくも両手を合わせる) ………。

私 それが、芝居にならんかなあつて。お父さんの生まれ変わりが家族に会いに来るんじやつけど、ドジで、失敗ばつかして、主人公に迷惑かけて困らす、みたいな……。まだ全然じゃけど。

母 おもしろそうじゃねえ……観たいねえ……あなたのお芝居がいちばん好き。

私 フフ、ほかに芝居って観たことないわあね。

母 ………。

——間。

私 ほうじや！ 新しい本ができたんちゃ。(鞆から本を取り出して母に渡す) 劇作家の会の本。

母 (表紙を見て)「ドラマの海」……。

私 今度、代表世話人になったんちゃ、会のお世話係。みなさんに推されて。

母 (手に持った本を開いて見るほどの元気はもうない) ………。

私 (自分の戯曲のページを開いて見せてやりながら)これ、「初恋はおばあちゃん」ってのが、俺の。

母 ………。

私 お母さんがちよつと前に、菅内の田舎に墓参りに行ったあね。幼馴染みのおばさんあと話しよつたじやん、澄子おばちゃんとか。あんときの、おばさんらあとのやり取りがおもしろうておもしろうて……それがヒントになったほ。

母 (本をなでて)すっごいねえ……よかったよかった……！ あとで楽しみに読もう。

けれど実はもう本を読む体力も気力もない……。

——またしばし沈黙。私、原稿に向かう。

私 (原稿を書きながら) ……司法書士に相談に行ったんちゃ。(なんだか笑って)

ハハ、相続放棄はもめるって言われた。んなこと言われても、ねえ！

……。

私 (ふと絶望感が悪寒のように背中を走って) なるようにしかならん。……ケ

セラセラじゃ。

母 伴介さんみたいじゃねえ。(半ばやけっぱちの感情で吐き捨てるように)「ケ

セラセラっ。ケセラセラっ」……。

私 ハハっ……。家に帰って、かおるに背中なでてもらうて慰められた。(思わず

舌打ちして) ああっ、情けない父親じゃのう。

……。

私 (半ば独り言)開き直ってやるしかない。稼ぐしか。ええもん書くしかない。

私の話のあいだも、母はぐったりとして。本は膝の上から布団をすべり  
落ちそう。

母 ああっ、痛い……痛いねえっ。

母、ぐったりする。斜めに起こしたベッドの上で体が傾(かし)ぐ。私  
本をのけ、サイドテーブルに置く。母の体を真っすぐに直してやる。

母 痛いっ。……痛あっ。せんないねえ……！

私、水差しの水を飲ませてやる。しかしさほど喜ばず。

母 ……ああ、せなが痛い。ちよつとぎすつてえ友昭君。

私、ベッドのあいだから手を差し入れ、母の背中をさする。しばらく…  
…。

母 痛いっ。……死にたい。

私 (悲痛)んなこと言わんでえや。

——沈黙。私、母の背中をさする。……。

母 もうええ。

——沈黙。母の苦しげな様子。……。

母、右手の人差し指と中指でゆらゆらと私を手招きして。

母 ……死ぬんかなあ。

私 (精一杯の嘘) んなことないよ。元気になるからね。

——間。

母 (指で胸の前に小さく×印を書き) 延命措置はしない。

私 大丈夫じゃから。ダンスもできたあね。ね、またカラオケ行こうや。ひばり

歌ってよ。

母 ……。

私 ね。約束したよ。

母 行きたいねえ……。

——沈黙。

私 (笑顔で。必死になって) 約束したからねっ。約束じゃからね。

母 ……。

私 ——約束よっ。

看護師D、来る。手にゴム手袋。不機嫌そうな顔。

看護師D (指を組み合わせてしごくようにして、ゴム手袋を手に馴染ませながら)

そろそろいいですか。面会時間終わりですよ。

私 あ。すいません。

看護師D ……。

私 痛みがあるんで。痛みだけは。

看護師D あとで座薬入れますから。

看護師D、私の目の前でカーテンをざつと引き、処置にかかる。

私 よろしく……お願いします。

私、病室を出ていく。しかし足が止まる。廊下の隅に思わず隠れる。こらえきれず声を噛み殺して胸を震わせる。

……………

その夜。私の家。

私、悄然と家に戻る。

妻、奥から出て来る。

妻 帰っちゃったぞ？

私 うん、いま……。

妻 お母さん、緩和ケアに入れた？

私 (笑いに紛らせて)……アハ、緩和ケアじゃなかった。六人部屋、狭い、薄っ暗い。周りは割りに元気なおばちゃんらあだから。

妻 ええっ、そうなん？

私 なんか機械的っちゅうか、冷たい対応だから……。

妻 何、病院が……？

私 (泣きたい気持ちだが……)アハ、あんなところで死ぬんかなあ……。

妻 ……。

——間。

私 実は……頼みがあるんちゃ——

妻 もう出んって電話！ あたし！

私 や、そのことじゃのうって。電話は出んでええって言ったじゃない。ほうじやなくて……

妻 何……？

——間。

私 その……二百万——、貸してくれんか。実は、債権回収会社から話があつて……

静かな夜。雪がしんしんと降ってくる。しんしんと……

妻 (頬を指先で軽くつねって)……。

——間。

私 どうじゃろか？

妻、降る雪を見る。

妻 ……。

私 ……あんた、この頃……

妻 何？

私 いや……ええ。怒るけえ。

妻 何？ ……何？

—間。

妻 なんなん？ 言って。

私 ……わしと話しちよっても、ちっともおもしろそうじゃない。ちゅうか、楽しそうじゃない——

妻 (カツとなって) 体がえらいほ！ 働いて働いてっ。かおるのご飯も作って。

—きょうも残業じゃったんじゃけえ！ さっき帰ってきたほっ。

私 わかつちよる。ごめん。ごめんっ。怒らんでもええじゃろ。

妻 (感情が高ぶって) だれの——、だれのために働きよるんかっ！

私 じゃからごめんって。悪かったっ。悪かった。ねっ。

妻 ——。

私 泣くなって。お願いじゃけえっ。

雪はますます降る。

私 悪かったっ。

—間。

妻 ……それで終わりなん？

私 は？

妻 その……二百万円？

私 いや……二百万じゃのうて。ほんとは三百万でチャラなんじゃけど。

妻 え？

私 百万は、わしの貯金とカードローンで、なんとかするけえ。こんなチャンス、もうないかもしれんって言うし……。

妻 ……。

私 あと——、お袋さんの借金もあるけど……それは……そのとき、相続放棄して……。

—間。

妻 ほかの仕事も考えたほうがええんじゃないん？ 収入の安定した。

私 (いちばんふれられたくないことを言われてムツとして) それ、いま言う？

妻 (泣くまいと思うが涙が出て) いま言わんで、いつ言うん！

私 俺なりにがんばりよらあね！ がんばりよるけど——、がんばって芝居書いても、どうにもならんこともあるっ。

妻 じゃったら、もっと——、もっとホントの仕事したらええわあね。

私 しよるじゃない！ 一生懸命書いて！ 稼ぎは——少ないけど。お金の部分

は……あんたに……助けられよるけど。

妻 ……。

—間。

私 (しかしだんだん腹が立ってきて)…それってなんなんっ。

妻 何？

私 あんたの言う、ホントの仕事って？

妻 ……。

私 ホントの仕事ってなんなん？ 金稼ぐことなぞ？ 金稼げばええん？

妻 なんかとひと言も言っていないでしょあたしは！ 人の役に立ったり。社会のためになったり。人を喜ばせたり。感動させたり。

私 ホントの仕事しちよらんみたいじゃんわしが！

妻 なんかこと言っちゃよ、ら、んっ。

私 人の役に立つもんじゃなかったら駄目なん？ いつも一生懸命芝居書いてきて—。そんときそんときに書けるもんを—、手え抜かんで書いてきて。

妻 —。

私 人の役に立たんかったら駄目なん？ 自分の正直な気持ち書くだけじゃ？

妻 それが人の心動かすってこともあるんじゃないんっ。それで賞を取ったんじやわしは！

妻 —。

—間。

私 お袋はどうなん？ お袋さんは？ 死にかけて、なんの役にも立つちよらん。

妻 なんでお母さんが出てくるん、いま！

私 役に立つちよらんどか、言うからじゃろあんたがっ。

妻 (激しく泣いて)役に立つちよってじゃあねえ、お母さんはッ！ すっごく役に立つちよって。すっごくッ。

私 どころがっ！ どころがよ！

—間。

妻 ……あなたの—、支えになっちよって。

私 (心底怒って叫んで泣いて)逆じゃろおがや！ わしが支えちよるんじや！

妻 わしが、介護しちよるんじやろおがや！

妻 —。

—間。

妻 (静かに)考えさせて…、お金のこと。

妻、奥へ引つ込む。

私 ああッ——。

——間。

私 離婚したほうが、ええんかなあ……。

雪が降る。降り止まない。………

………

空が白んでくる。快晴。朝は、きょうもやってくる。

息子、飛び出てくる。そして、私と妻も出てくる。

息子 見て見て、お父さん！ 外真つ白じゃ！

私 ……ホントじゃ。冷えるはずじゃ。

妻 珍しいね、こんなに積もるぞ。

息子 オレ初めてじゃ。

妻 銀世界って言うほよごういの。

息子 銀世界?! (外へ飛び出して) ちょっと見てくる!

妻 ジャンパー着て! かおる! かおるっ。寒いよっ。

妻、息子を追いかけていく。

私 私を生んだ日も大雪じゃったと、母さんは、私が幼い頃から耳にタコができるほどくり返して。玉の汗をかきながら、そりやもう必死であんたを生んだんじゃけえ。あんだだけがなされたのは、あれつきり。一生に一度。……雪の降る空へ、まるで飛んで舞い上がりそうな母さんの高揚した口ぶりに、いつの間にか、私の心の中にあつたかい「何か」が植えつけられちゃって。いま、先が見通せんのに、それでも劇作家の仕事に人生を賭けちよられるのは、母さんからもらった、この「何か」のお陰じゃろうか……。

けたたましく電話が鳴る。

私 (直感的に不吉なものを感じて) ああッ来た! ヤな感じっ。

舞台の別の空間に看護師Dの姿。あわてたふためき、思いがけず透明なガラスにぶち当たった小鳥のようにパニックになって。

看護師D あの、あの——、座薬を入れようとしたら、広兼さん暴れられて! 足

を蹴り上げて、嫌がられて。血圧が——、血圧が計れん状態なんですつ。緊急処置をしますけど。早くつ。早く来て！ 急いで来てください！

.....

雪のように白いベッド。そのベッドに横たわっている母。腹の上に両手を組み合わせている。D病院の一室。

母のベッドのそばに、私と妻と息子と、医者D。医者DはD病院の権威ある医者で、枯れた風格がある。

医者D ……人は生まれて死ぬまで、三つの橋を渡ると言われています。まず、生への橋。この世へ生まれてくるための橋を渡って、人の世に生まれいずる。お母さんも、そのまたお母さんによって、命の橋を渡ってこられた。……二つ目の橋は、結婚して働いて子どもを育てるといふ橋。今はそうでない方もたくさんおられますが……、愛する人と出会い、そして命を授かり育てる、それが人生の意味を教えてください。……そして最後には死の橋を渡る。だれしもが通らねばならぬ、避けて通ることのできない橋であり、この橋を立派に渡り終えて、人生の幕が無事閉じるわけです。お母さんもいま、七十三年の生涯を無事渡り終えられた。精一杯生きてこられたと思いますよ。……私（独白）有り難いお話じゃけど、この医者とは、いま初めて会う。緩和ケア病棟の医者で、母さんを診察したことがあったのかも。おとなしく聞いちゃったけど、むなししい風が吹くばかり。（医者Dに）あの……

医者D （まだ話を続けるつもりだったが中断されて）ん？ なんですか？

私 結局、死因はなんじゃったんです？

医者D 多臓器不全です。

私 いや、結果じゃなくて。なんの悪性腫瘍じゃったんですか。それがずっと知りとうて。なんで母は亡くなったんですか？

医者D それは……肝臓の……腫瘍かと……。〔看護師Dに〕きみ、末期の水を。（家族に）みなさんで、お母さんに、末期の水を。

末期の水。

悄然と看護師Dが来る。お盆を持って。綿（ガーゼ）と水皿と割り箸。

私 （妻に小声で）末期の水って、どうやるん？

妻 知らんあたしも。口を濡らしてあげるんじゃないん？

私、たどたどしく、割り箸で水を含ませた綿を母の唇に。そして妻も息子も。

医者D この時間を、臨終の時間に致しましょう。午前九時十分。〔愁傷さまです。

医者Dと看護師D、両手を合わせて頭を下げる。私と妻と息子もそれに  
ならって合掌し、頭を下げる。

医者Dと看護師D、出ていく。

私 多臓器不全って結果じゃなくて、病気の原因を知りたいんじゃないわしは。献体  
して解剖してもらおうかなあ、なんの悪性腫瘍か。

妻 お母さん痛いの嫌いでしょ。

私 (納得がいかない) ん〜。

妻 お医者さんも勧めんでしょ。

私 あの医者ど、きょう初めて会ったんだ。

妻 え、そうなん？

私 忙しすぎるんじゃないら大病院は。

妻 (いさめて) 声でかい。

私 狭っ苦しい六人部屋じゃのうて、緩和ケアに入れてやりたかった。こんな  
じゃったら、家で看取ればよかったのう。

妻、バッグから安全剃刀と化粧道具を取り出す。うっすら生えた母のひ  
げを剃る。

私 (母の額をなでて) よかったねえお母さん。時江ちゃんにきれいにしてもろう  
て! (言ってる途中でこらえきれず涙が噴き出す) かおる、おばあちゃんま  
だ——ぬくいつ。

息子、祖母の額にさわってみる。そして、父である私を心配して、その  
背中をなでてやる。

火葬場の職員が出てくる。どこか厳肅さを演技しているように見える。

火葬場の職員 それでは、お骨揚げを執り行います。

そこは火葬場になる。母はそのまま横たわっている。

火葬場の職員は地味な背広に白手袋。寝ている母の死体の枕元に白い骨  
壺を置く。長い竹の箸を持っている。

皆でお骨揚げをする。寝ている母の体をそのまま「お骨」になったもの  
と見立てて。長い竹の箸で。職員の「手ほどき」を受けながら。

私 (一緒にお骨揚げをしながら……独白) 家族葬ということにした。お坊さん  
は呼ばずに。信心深くもなかったし、生活保護ではお布施は出せんというこ  
となので。そのまま直に火葬場へ。

あまりにさみしいからと、妻が花束を買ってきて、母さんの棺に手向けてく  
れた。その花も遺体とともに焼かれて灰に。残ったのは骨だけ。その母さん

の骨は腐ってて。細くて、もろくて。骨の中がくすんだ緑色で。まるで沼の水面（みなも）に浮かぶ腐った藻のようで……。

——間。

私 実はあのとき、（母と踊る仕草をして）病室で母さんとダンスを踊った最期の夜、母さんが震える指で私を手招きしたときに、まだ会話の続きがあつて……

（回想）お骨揚げをされていた母がその場でそのまま演じる。

ほかの者たちは母と私の様子をそっと見守る。

母、右手の人差し指と中指でゆらゆらと私を手招きして。

母 ……死ぬんかなあ。

私 （精一杯の嘘）んなことないよ。元気になるからね。

——間。

母 （指で胸の前に小さく×印を書き）延命措置はしない。

私 大丈夫じゃから。ダンスもできたあね。ね、またカラオケ行こうや。ひばり歌ってよ。

母 ……。

私 ね。約束したよ。

母 行きたいねえ……。

——沈黙。

私 （笑顔で。必死になって）約束したからねっ。約束じゃからね。

母 ……。

私 ——約束よっ。

母、私の顔をなでて。

母 ……友昭君、ありがとう。

私 ——。

母 （ぼんやり虚空を見て）時江ちゃん。かおる君。ありがとう。

私 （涙を必死にこらえて）うん、うん……。

母 康子、典子によろしく。

私 うん、わかったけえ。

——小さな沈黙。母、また指で手招きして。

母 (自分に言い聞かせるように。強い確信と悲壮感を持って) 悔いはないっ。悔いはないっ。

母、またお骨に戻る。

私 (独白) 戦争末期の昭和二十年、国民学校の四年生だった母さんは、大好きな親友の恵子ちゃんと別れ、都会の町から両親のふるさとへ疎開、そのまま田舎の山奥で育った。中学を終えるとミシンと洋裁を習い、一度は洋服店に勤めるが、その店がつぶれて田舎に逆戻り。それから今度は、活版タイプを習い始め、その頃に、若き労働健康党員の父さんと出会い、結婚。ともに平和的な活動をしながらいざ子ども三人を育て、姉と妹のふたりを大学に行かせた。

カラオケ好きで、社交ダンスも習っちゃって。じゃけど、最後は父さんの借金に巻き込まれて……。クレジットカード会社やサラ金から何度も支払いを督促する訴えを起こされて。その恐ろしさは、母さんの心臓に、鋭い針を何本も何本も突き立てたことじゃろう。

……苦勞の多かった母さんの喜びはなんじゃったのか。あの、家の屋根が大雨でぐどれた日の、十八歳の息子の私の、「きっと迎えにいく」の言葉を信じて——、信じて待っちゃってくれたのに——

火葬 (非常に感心して) いやあ……ご覧ください！ 立派なご仏です。

私 (独白) ほかに褒めるところがないんじや。ボロボロの骨じゃから。

私、母ののど仏に問いかける。

私 (なんだか怒りを含んで) 本当に悔いはないん？ 悔いはないぞ？ なんて

そんなに言い切れるん？

母 ありがと、友昭君。

私 (胸が詰まって) 迎えに行つてあげられんで、ごめん。ごめんっ。褒められなくて、お母さんに褒められなくて、わし頑張ってきたぞにから——

母、私の頬をなでて。

母 悔いはないっ。

また雪が降り始める。こんこんと雪は、降りつもって……母と私のふた

りの上に——

……………

四月の終わり。母のアパート。段ボールが二、三個片隅にある。あとは

きれいに片付けられている。

妻、手にビニール袋。ビニール袋にはぞうきんやスプレアの洗剤など掃除用の細々した物が入っている。

私、来る。濡れた手を乾かしながら。

私 (ガランとした部屋を見渡して) 戸締りはええ？

うん。

私 ……ん？ それは？

妻 (ビニール袋の中) 掃除道具。ぞうきんとか。あ、郵便きたよ。(私に渡す)  
私 うわっ、サラ金からじゃない？！

—間。

妻 ……捨てる？

私 一応……取っちょく。あとでなんかあつたら困るけえ。

妻 住所変更出しちよつたら、郵便局に？

私 それはかえってアレじゃない？ 居場所知られても……。相続放棄したけど  
妻 じゃ……。 ……。

—間。

私 あああ、長かったなあ。

妻 よう片付けました、あれだけの荷物。お父さんお母さん、ふたり分じやった  
私 もんね。  
捨てた捨てた。丸ふた月かかった。

妻 あした、県営アパートの人と立ち会いして、終わりでしょ？

私 鍵返して、やっど。いや、あと敷金の清算もあるか。

妻 もうちよつとじゃ。

私 県の職員細かいけえなあ。排水溝の中までチェックして。ちよつとでも汚れ  
妻 ちよつたら敷金からさっぴかれる。

妻 お疲れさま。あなたようがんばったわ。

—間。

私 ……ありがとね。

妻 ん？ ああ……。 ……。

私 なんか空がひとつ晴れた。雲がひとつ消えた。  
妻 ……。

——間。

私 二十四のときの、わしの字じゃった。

妻 昔の……契約書？

私 うん。親父が、土地買ったときの契約書。債権の会社が返してきた。なんか思い出したわ、いろいろ。

……。

私 連帯保証人のハンコ押したときの、蛍光灯の、なんかくすんだ照り具合とか、

親父のすまなそうーな顔とか、バツと蘇ってきて——。ハハ、馬鹿じゃったなあ……。

妻 (微笑) ……。

——間。

妻 ホントにもう……ほかにはないんじゃない？

私 あとは俺のカードローンの借金返すだけじゃ。それは、ま、今まで通りちよつとずつじゃから……。

——間。

妻 思いつめちよつたぞ……あたしも。

私 うん。ホントごめん。

……。

私 ありがとう。

……。

私 ホントありがとう。

——間。

妻 ええもの書いてね。ね？

私 フ、もつとホントの仕事、か。人の役に立つもの、か……。

妻 応援するけえ。広兼友昭の一番のファンなんじゃけえあたしは。よう知つちよる。ありがとう……。

——間。

妻 いや、あ。二番か。

私 え？ 二番？ なんで？

妻 二番でした。

……。

私

妻 一番は、あなたのお母さん！ ンフフッ。  
私 ……。

—間。

私 (段ボール箱を抱えながら) 行こうか。  
妻 うん。  
私 忘れもんはないね？  
妻 ん……

妻、部屋を見渡して……

妻 あ——！ あ、そこ！  
私 え、何？  
妻 ここ！  
私 何？ 見えん。  
妻 見えん？ ここっ！  
私 んん？ 床が光って……(よう見えん)  
妻 ここっ！

妻、床についたキズをはっきりと私に教える。

私 ああっキズいつちよる！ ええっ？！  
妻 テーブルのあつたどこじやない？  
私 ああっ——、こたつじや！ あああ！ こたつひっくり返して使いよつたん  
妻 ちやお袋さん！  
妻 結構あつたかいよアレ。  
私 ええっ？！ 知つちよるん？ 注意せんにやあ！ (キズをまた見て) ああ  
妻 あ文句言われるよう、ネチネチネチネチ。

私、床のキズを指でこすって消そうとしてみたりする。

妻 考えてみれば合理的かも。最初は驚いたけどお母さんの発想。  
私 え、何が？ なして合理的なん？！  
妻 だつて。

私 ケンカになったんじやけえわし。(やや大げさに母を真似て)「足元が冷える  
そ。火事になりやせん。一年以上コレをしちよるの！ この家じゃわたしが  
あるじじやっ！ 命令するなあ！」

妻 (芸達者でおどけた私の演技に笑ってしまう) ンフフッ。  
私 (突然感情が噴き出して) ンウっ——、ンウっンウ——……

私、思わず嗚咽する。……  
妻、私の頭を優しくなでる。……

妻 (ふと)あ。  
私 ん？  
妻 ……。  
私 何？  
妻 ……雪じゃ。  
私 え？  
妻 雪。チラッと。  
私 もう四月よ。  
妻 じゃけど——、ほら。

妻、窓のそばへ。私も窓のそばに立つ。

妻 ……。  
私 あっ……。  
妻 ……。

——沈黙。

妻 ……いま、こたつは？  
私 お袋さんの？  
妻 うん。  
私 家に、持って帰った。

——間。

妻 (微笑んで……)うん。

妻、そっと私と腕を組む。  
ふたり、ふりつむ雪を見る。……

(幕)